



あらしにあこがれて

written by hikali

1.

1.

山道の空が開けると、河が見えた。

と、いっても、密林の大地を削る、激流のような大河だ。

わたしはその崖下の眺めに一息をつき、やがて南の大河クローナに合流する支流の流れの見事に息をのむ。

強行軍だったから息も荒いし、汗もひどい。

「ずいぶん、さ、流れじゃない？」

「雨季が終わったばかりですから、流れが速いです」

セレンはそつなく答え、ぬかるみの残る谷沿いの泥道を、ぐちゃぐちゃと歩いていく。

底なしの体力というよりは、わたしがこもりすぎなのだ。

おいていかれるような気さえして怖くなるのだが、この子は従事の仕事を果たすことに一生懸命なのだし、やっと追いついて聞く。息が荒い。

「きみはさあ、彼氏はできたの？ ニホとはいい感じだったじゃない」

「興味ありません！」

にやけてつつかと疲労困憊ながらも、だいたい元気が出る。

軽薄なことは分かっている。それでも、聞かずにはいられない。

シドの首都ラスペから辺境のペネスまで向かわなければならなくなったのは偶然の気まぐれで、そのときたまたま空いていたのが不愛想なセレンしかいなかっただけ。

しかしこんなにも理不尽な旅程になるとは想像なんてできず、こんなになるんだったら軽はずみに行くことにしなければよかったと、ルナは後悔し続けることになる。

ラスペの兄の工房は大所帯で、国の大層なところから大量の資金を支援されている。

ルナは妹としてやんごとなき立場にあることになっている。それでもやっていることは雑用で、研究らしい事に時間を使わせてもらったことはないし、実権なき重職ほど面倒くさいものはない。予算がないと言って誰もに不満をぶつけられるし、頭を下げてお金をかき集めてきても、誰もが見てみぬふりをする。

実妹で、なおかつ高名ということになっている研究者なのだから、わたしに任せておけばだいたいうまく行くと思われている。それは一切の助けがないという意味だし、実際に手助けする者は、いない。

正直わたしは疎まれている。研究資金が足りないのはお前のせいだと。

だから人に使役されることには心底腹が立つ。

だいたいこんな辺境くんだりまでわたしを必要とするなんて、なにさまのつもりだ。

竜狩り都市で名高いペネスは、ラスペから数日の行程で、こんなジャングルのど真ん中に都市があること自体が間違っている。

「あー、もう、面倒なのよ！ ペネスになにがあるっていうの？ あいつが稼いでいるっていう以外に用はないじゃない！ あのめんどくさいやつが！」

「それは重要だと、ルナさまが……、」

「口答えするな！ 面倒な仕事しか思い浮かばなくて不愉快！」

ルナは立場上、多額の研究資金を貴族たちより託され、それを分配する重要な立場にある。

ルナにしてみれば、研究資金は重要。

そもそも兄であるパルがもっともらしい成果をあげられないのが問題で、その報告書に載るのはいつも辺境の天才。だから、わざわざこいつのために足を運んでる。

「なんで、あんなに情けないやつのために、来なきゃいけないのよ！」

セレンは黙っている。

数百人はいたはずの兄貴の愛弟子の中で、唯一食い扶持を稼げているのが、この憎たらしい幼なじみであることは否定しない。それでも、あまりにも野蛮すぎる場所じゃないか、ここは！ ジャングルのど真ん中じゃないか！

兄貴と銀頭が親しく話しているのはいらいらするんだけど、あの馬鹿はわたしなんかには興味がないんだ。

ゆりかご都市と呼ばれるペネスは、深い谷間に築かれた橋上にある。

サウスの遺構の上に建っているというのだが、サウスが建造した、いまだにどうやって創ったのかよく分かっていない橋の上に、太守を置くほどの重要な都市がある。簡単に言えば、失われたこの大地から立ち去った超文明の遺構の上にペネスはある。シド

全土で起こっているルネサンスは、その超文明を取り戻す運動であり、最強の文明国の地位を取り戻すことを標榜する運動なのだ。そのための金は惜しまない。

サウスの巨大な遺構の上にあるセントラルを擁すラスペが首都であり、辺境のペネスが副都とみなされているのはそういう理由だし、それがルナには理解はできるけど、納得は行かないのだ。

橋というのは両端があって、真ん中があるので、両端を強固な城塞にしまえば難攻不落の城塞都市になる。肉食獣脚竜だらけなジャングルにあってのほほんとしているのはそんな理由で、単なる大きいだけの橋上都市にも関わらず、周辺ジャングルの重要な物産の集積地になっている。唯一の安全な都市なのだ。

入り口の城塞の幅は数百メートル。中央付近まで行くと幅1キロ近くになる、全長数キロの橋上都市がペネスだ。

城門を抜けると長い下り坂で、つり橋なのだから真ん中が低くて、なぜだかひろい。そのあたりは中心部というか山の手で、高い両端の方から見るとその全貌が容易にわかる。

まるで盆地を見下ろしているよう。

数層の高層建築が建ってはいるが、さすがにラスペの街並みと比べるべくもない。

幌をかけた竜車が頻繁にすれ違うが、積んでいるのは高価な香辛料の類。岩塩、ターメリック、サフラン、ナツメグ、シナモン、胡椒。数え切れないほどのジャングルの産出物が集まるのが、ペネスなのである。

「まだだいぶ約束の時間には早いのですけど？」

セレンの言葉にムツとする。

急がせたのはお前だろとは言わないが、約束より前につくことは悪いことではない。

「市へ行こうか。ちょっとおいしいものを探そう」

東西に伸びるペネスには北と南に市がある。南は特権階級の街で、庶民であるルナが向かうのは北の市だ。

ルナにとって、ペネスは慣れ親しんだ都市で、手を握ると心が急いた。

それはシルバがいるということもあるのだが、ラスペにはない食材の豊富さは目移りがする。まず第一に河口地帯にあるラスペと、上流にあるペネスでは川魚の肥え方が違う。激流を登ってくる川魚はだいたい美味しく、ラスペでふらふらとしている魚とは違う。

そしてさらに言うべきは、この魚を前提とした料理である。

引き締まった川魚には、岩塩が合う。

脂っぽい料理はいろいろと誤魔化しが効かせやすく、香辛料をまぶすと何を食べているのかさえ分からなくなる。魚が食している苔の味までするのがペネスの魚だ。

「お姉さん、活きのいいコウナゴがあがってるよ、どうかい？ 美人さんだからおまけしとくよ？」

いつもの売り文句だ。

「この辺で採れるの？」

「ああ、上のサンザ湖が豊漁でね、今が売り時なんだよ、溢れてるんだ」

みると、菜種油で揚げているコウナゴで、岩塩をかけると確かにおいしそうだった。

「安くしとくよ」

「じゃあ、10尾」

「まいど」

驚くほど安い値段でコウナゴを買って、こんなに食べられないからとセレンに分ける。

「熱いですね」

「揚げたてだから」

二人でほくほくと食べると心が落ち着く。

卵がおいしい。

そんなことは考えていなかったのだが、市で売ってもらったのはメスばかりだったみたいで、そのおいしさのほとんどが卵だったのではとってしまう。

シルバの工房は、平屋のせまっ苦しい建物で、貧しい工房にしか見えない。

これがシド随一の知恵者である兄の一派の研究資金のほとんどをたたき出している工房で、その実情をルナは知りすぎるほど知りすぎている。

数人の弟子たちがふいごを踏み、あまりの暑さに汗をだらだらに流しながら、レモン水を飲んでいて。思わず鼻白む。その器を取って、飲む。それから言う。

「これ、塩入ってないじゃない！ 味で誤魔化さないで！ あんたたち死ぬわよ！」

シルバは、わたしを見て開口一番に言った。

「ルナ、なに？ なんできたの？」

「あんたのためでしょ！ あんたの仕事は何？ このベネスで研究資金を稼ぐこと！ あんたが望んだんでしょ！ あんたは馬鹿なんだから、最新のサウスの書物が見つかったの。それを届けに来たわけ。あと塩。工房は炎で暑いんだから、汗で失った分の塩は取らないと駄目。この前、危なかった子がいたでしょ！」

この幼馴染は自分の興味があること以外はほとんど興味がない。

彼はおそらく我がないし、執着するものがほとんどない。

だからその後の激動にも冷静沈着な振る舞いできていたのだろうし、名君と呼べる冷静沈着さもそこから生まれていたのだろう。でも我がない彼は、ほんとうに人なの？ 彼には欲望がない。

彼の寛容さを航海した人たちは、存分に自由を満喫したのだし、わたしでさえもありえないぐらいに許された。どうやってバランスを取っているのかさえ分からない、とりつくところのないふわふわしたクラゲが、シドをうまくまとめていたのだ。

それがおもいのほか心地よくて、つい、つつきたくなる。

「そうだね。塩レモンにしよう。えっと、きみはなんというの？ 初めてだよね？」

「セレンです」

シルバは頭を撫でて、塩レモンの作り方を教えてやってくれ、と簡単に言う。セレンはわたしを見たのち、しぶしぶ顔くのを見て、工房の男の子たちに、号令をかけていく。

「いい子だね。きみが仕込んだのかい？」

「ルナでしょ？」

シルバはしばらく考えた。

「ルナ、久しぶりすぎて照れるんだ」

「先月も来た！ サウスの書物が見つかったの。あなたサウス語読めるの？」

「いやあ……、でもそれってさあ、翻訳して送ってもらえればいいんじゃない？」

「そしたら、わたしがここに来る口実がなくなるでしょ？」

もごもご言いながら、シルバは不承不承ながら納得する。

「じゃあ、読み上げるから、ちゃんと写筆してよね！」

シルバはその横暴に耐えるが、すぐに速記ができる者呼び、ため息をついた。

2.

「じゃあ、読み上げるから、ちゃんと写筆してよね！」

シルバはその横暴に耐えるが、すぐに速記ができる者を呼び、ため息をついた。

2.

この目の前にいるひよろひよろは天才だ。

銃器に限った場合ではあるが、才能があることは否定しない。

神から授かった才能の持ち主をあげると言われれば、まずこいつを、不愉快ながらも挙げる。まず、射撃の腕前が神がかっているし、銃器を創ることもできる。無駄に自分を誇るところもないし、サウスの技術に素直に感心し、簡単だというように模倣する。

たった数分で、難題の答えを見つけ出すし、そのために猛勉強をすることもしない。

わたしとまったく正反対の天敵。

おそらくというのも変な話なのだが、彼がサウスの工房にいたとしても一流の開発者と最新技術について話し合うことができただろうという確信はあるし、ときおり彼が虚空を見上げてぶつぶつと話しているのを見て、ああ、サウス人と会話しているのだな、と思うときさえある。

彼がサウス語を学ぶことを必要としないのは、ちょっと聞くだけでそれがどういう技術的思想で実装されているかを理解するからで、虚空に向かって口走った言葉の中にはその書物にさえ書いてないことだって混じっていて、はっとする。

その不愉快さが開発者としての嫉妬であるとは分かっているし、わたしが猛勉強してようやく理解したことを、彼は夜の散歩でもしてきたようにいつの間にか通り過ぎていく。

しかし彼は”銃の”天才であり、シドという国での居場所はペネスにしかない。

彼は自分が、禁忌に属する分野の天才であることを理解しており、本人は一切喜んでいない。彼には強要をしたくないが、それでは兄の弟子たちの資金繰りを維持できそうになく、しかたなくわたしが嫌な金銭面の役をする。

「この銃は後詰め式で、機構もそんなに難しくないでしょ？ 工房じゃあ直管も作れるし、この後詰め部分の機構も難しくないと思うのだけど」

そうやってひっぱたいやらないとやる気にならないのだ。

「ルナは、ほんと分かっていて助かるな。これは確かに簡単で、今すぐにでも作れるよ。このドライゼ銃は革命だね。こんな簡単だったなんて。よく見つけてきてくれたね」

銀頭は関心を持ち、側に控えていた者に気づいた点を語り始める。鉄の温度はこの通りではだめだ、そんな温度はこの窯ではでない。低温で叩いて鍛えるしかないね。

熱心なシルバ信者である、工房長のメイファは頷いて、その言葉を記録していく。

シルバが買って来た解放奴隷で、元は東方の貴族の娘だと聞く。いや違う、奴隷を買って、市民権を与えたのだ。解放奴隷を買ったのではなく、奴隷を買って、なんの条件もなく市民権を与えて、奴隷の身分から解放したのだ。

それが恐ろしく有能なことは否定しない。

ルナはさすがに、現場までは口を出さないのであるが、その真剣な表情を見ていると、ああ、銀頭だなと思ってしまう。10年前に戻りたいとは思わないけれども、孤児と名家の偉そうな跡取り娘という、恥ずかしい出会いをしたあの頃に戻れたらと思ってしまう。

わたしは存在を消し去ってしまいたいぐらい尊大だった。

彼を奴隷だと思っていた。

恥ずかしいにもほどがあるし、あの時間をやり直したいとも思う。

今のシルバを見ていると、人として何をすべきなのかの、手本を見せられているようで怖い。

シルバは研ぎ澄ましたうつくしい銃のようだ。

射手に文句さえ言わずに、ただ言われたとおりに発砲する。

ルナが神童と目されていた兄の懐刀と思われていた時代は、まだよかったのだけど、兄のメッキがはがれていく過程で、ルナはつらい思いしかしなかった。脱落していく膨大な弟子たちの世話をしながらも、また駄目だったとため息をつく。そんな中で遠慮なくおまえは本物だと思えたのは、この腐れ縁だけで、たぶん本人には自覚がない。

「あー、面倒くさいやつね！ これがほんとに役に立つといえるの？」

銀頭はしばらく考えて、
「うん、まあ、そんなに悪くないと思うけど」
これがいらつくだ。
さっき褒めていただろ。
サウスの最新技術だぞ。これを見つけるのにどんだけかかったと思ってる？
「ただ、ちょっと難しいんだ。これが書かれた時よりも、今の鉄は固くない。銑鉄はもろくて鍛鉄は固いことはルナも知ってる
だろ？ でもこの文章を聞く限り、ぼくらが鍛える鍛鉄よりも固い鉄を想定して書いている。未知の鉄だよ、何か知らないかい？」

この幼馴染がむかつくのは、おそろしく正確な所だ。
油断していると気づかないのだが、「書を聞く」というのは、サウスの流儀だ。サウス人は書を残さなかった。現在伝えられているのは、それを周辺民族が速記したもので、サウスでは歌と称される。歌の速記本として残っているのがサウスの技術書なのである。

こいつはいつもサウス人のつもりでいる。
「あんたはサウスの音を聞いたことがあるの？」
これはいじわる。
「ないなあ、読んでくれないのかい？」
「教えてあげるから、自分で勉強しなさい。つきっきりで何か月でも付き合うけど」
「ルナはぼくが面倒くさいから、いくらでも付き合ってくれるのかい？」
思わず反論する。
「めんどくさいはやめなさい」

嘘を言う。わたしはどんなにめんどくさくても、銀頭のきれいな言葉を聞いていたかった。こいつのことは実現には難しいことを言うけれども、かみ砕くとだいたい正確なのだ。その正確さを聞いているのは、きれいな音楽を聞いているよう。それは神官の宣託を聞くように心地よいものだった。

のちの技術法制の話につながるのだが、リニーが巻き起こした激論は、最前線の自由都市を難攻不落の最前線に変えた。一時はシド中の発明家の半分がこの都市にいたというし、莫大なシドの富が防衛を理由にこの都市につき込まれ、ラスペ、ペネスに続く、第三の自由都市サイルがこのボルニア戦線の最前線に築かれた。

広大でありながら難攻不落の都市は、きちがいたちがたむろする最前線になり、最高の楽園だったが、それは次の話だ。サイルの話は複雑なのである。たった一人によって解決するまで、恐ろしいほどの変遷をたどる。奇跡の都市は恐ろしいほどの変遷をたどるのである。サイルの話はとても面白いので次にしよう。

このときの銀頭はだいたい銃の機構にしか興味がなくて、目の前に提示された技術書に夢中だった。ドライゼ銃と書かれた技術書に夢中で、それがどう使われたかには興味がなく、その機構のすごさに打ちのめされていた。

わたしにはどこがよいのかわからない。
「こんな合理的な銃があったなんて。ライフル溝を設けてしまうと、竜を殺してしまう。だから滑空砲のままの方がいいんだけど、そこが問題じゃない。これは何度も撃てる銃だよ」
何を言っているのか分からない。シルバは熱っぽく語る。
「先込め式ってわかるだろ？ 今の銃が、だいたい3分ぐらいの充填時間が必要だったのに対して、この元込め式は30秒ぐらいじゃないかな。単純に6倍。相手が1発撃つ間に6発撃てればそれは無敵だよ！」

うん、なんだかよく分からない。それでも唯一の相棒のように話してくれるのが嬉しくて、なにしてるんだろと思うのさえ忘れてしまう。

ただ、シルバは殺すために撃つ銃を造っているわけではないから、ペネスでの仕事においてどれだけ有効かも、よく分からない。だいたい竜は発砲しないし。

そもそもあんたは一発百中の奇人じゃないか。
短時間で何発も撃てることを必要としないのだから、この興奮のしようはよく分からなかった。ただ、のちになってわかってきたのは、こいつは竜を無力化する竜狩り部隊をボルニア戦で投入してほしい気だったらしい。つまり百発百中でない砲兵部隊が欲しかったのだ。

そうすると射手はへたくそだ。
だから、5発失敗しても1発当たればいいという状況を喜んだようなのだ。
「こんなの意味ないでしょ！ あんたがおかしいの！ 竜を失神させることができるのはあなただけなの！ 馬鹿なの？！ 騎手を殺した方がいい！」

シルバはしばらく考えて、おもむろに言った。
「ルナ、やめてよ。ぼくはだれも殺したくないんだ。それに騎手を殺すのは無理だ。正しくないよ。騎手は殺すべきではない。騎

手を殺したらその家族には恨む権利が生じる。シドは恨まれる国になるんだよ。それよりも竜を無力化したほうがいい。攻めるのが難しいと理解させればいい。追っ払えれば充分なんだ」

ぼそぼそという声に惹かれたというよりは、言っていることの大きさが瞬間に理解できなかった。そもそもこの時期にこいつが天才的な領主であることを、分かっていない方がおかしいという方がおかしい。

シルバはこの時は単なる鉄砲屋なのだ。

のちにシドを率いるのは、死神リニーでありその主君は便宜上シルバになる。

リニーはシルバの権限を最大限に生かし、何もかもをするのだが、シルバはすべてを許す。シルバの陣営にはおそろしく有能な野ばらの諸侯が集まり、それに対してOKとNGを言うのがシルバの仕事だった。

兵器を、竜を追っ払うためだけに使うと言ったのはほとんど唯一の自己主張だ。

これでボルニアに勝てるのかとはふと頭にはよぎったのだが、この方針が叙事詩にうたわれる野ばらの諸侯を支えたのである。殺さないと宣言することは、たしかにシドの立場を守っていた。自分たちは侵略されているだけだと。そうするとどちらが暴虐か合戦となる。シド・ボルニアの一大大戦がそれほどの損害もなく済んだのは、兵を殺したら負けの戦いに持ち込めたからだというのが大きい。

こんなバカなことをシルバが言っていたのは、ボルニアの史上最強の騎竜兵団が侵略してくることがほとんど確実だった時。きれいごとというのは容易いが、大量殺戮を競い合う大戦になっていたらどれほど恐ろしい歴史になったかと考えると怖気が走る。シルバがいなかったらと思うと怖い。

3.

3.

こんなだったシルバを一言でいうと、お金がないという言葉になる。

わたしがほとんどのお金の流れを握っていたし、とにかく理不尽なほどに兄の工房にお金を吸い上げられていたことは事実だ。それをやっていたのはわたしであり、理不尽なことをしていたのがわたしだったので、いつ工房の人間に、シルバはしないとしても、だれかに殺されるかもしれないと思っていた。どんなに恐ろしいことをしていたのかさえ、わたしには見当さえつかない。

それでもシルバは寛容で、わたしが常に工房にいることを許してくれる。

わたしはその工房にいて、サウスの書物が形になっていくのを見ながらゆるやかな昼を過ごすのが好きだった。そこには都会の喧騒はなく、ありがちな書類仕事もなく、真剣な、しかしのどかな手作業しかなかった。

シルバは板状の鉄を曲がるまで高温にしてらせん状に巻いて筒にする。

かちんかちんと叩きはするけど、お互いのやり取りはささやき声のようで、ごうごうという炉の音にかき消されそうになる。

この製法が稀有であって、板状の鉄を直線的に芯棒に単純に包み込むようにして作る筒とは圧倒的な差があった。強度が違うのである。シルバの筒は暴発しない。それがブランド価値になり、多くの貴族から発注が殺到していた。農耕地の害竜を追っ払うのに使うのだという。畑を荒らす竜に発砲して痛みを覚えさせると、銃声に怯えるのだという。

シルバは奇怪な装置を作って、砲になる直管を造り始めていた。旋盤に似ていながら、あちこちの温度管理が容易にできる。微妙な温度変化を駆使して、筒の芯棒である鉄と管の温度差を変えていく。叩くと溶けて筒になる。それを叩いて、火入れをすると鋼鉄になる。

シルバの未知の鉄という宿題は、まだ念頭にあった。

純鉄を叩くことで炭素を浸炭させることで、硬くなることはよく知られていた。

しかし、ダマスカス鋼と表記される鉄のことがまったくわからない。この製造方法がわからないのだ。というかダマスカスってどこにあったの？

鋼鉄の筒の作り方はほぼ確立されていて、繊細な銃にしていく作業が最難関だったが、シルバは5秒もかからずに適切に火薬が発火する場所を餡のように切り取っていき、弾を込める可動式の覆いがスムーズに動くように僅かな誤差を小さなハンマーで調整していく。

ドライゼ銃の名称が、シルバ銃とならなかつたことの方がふしぎなほどで、実質的にシルバはドライゼさんの銃を乗っ取った。シルバの工房でしかこれは作れないし、その利点がわかってもし真似できる工房はなかった。

シルバのドライゼ銃だとあちこちで呼称された。正直面倒なので、以後はシルバの銃と呼称することにする。

シルバの銃はだいたい面倒くさい銃で、そのめんどくささのおかげで暴発がほとんどない安全な銃になっている。そのためにおそろしいほど強度確保のために叩くし、叩くたびにずれる正円の砲を、常に微調整する。

そんな誤差も許さないのかと思うのが日常で、わたしにはどこに狂いがあるのか分からない世界で調整していく。おそろしく精密な銃が生れていく工房を眺めるのはのんびりとしたものなのだが、シルバが試し撃ちをすると、必ず欠陥が見つかる。

「5センチずれているかな。微妙だけどね。これだとうまく行かない時もあるよ」

50メートル先から撃って5センチである。

変態的な射撃の名手がこのシルバの銃の精度を決めていた。神がかっている射撃の名手があつてないと言えば、誰も言い訳ができなくなる。シルバはそもそも射撃の腕があつて、そこから自分で作る銃の信頼を獲得していった。

「この銃は正確ではない」

これに抵抗できる人はいない。

目の前にいるのが射撃の神だからだ。

それで、正確だとお墨付きをもらった銃を固定して、機械的に射撃精度のテストはできる。同じ条件で固定した正確な銃と、テストする銃で比べれば結果は明らかだからだ。

※

姉貴風を吹かせていると言われるのは好きではない。

そもそもわたしはシルバより1年年長なだけだし、正直に言ってわたしは雑用係の脇役だ。シルバがいなければ兄の工房は存続

できず、彼が主役であることは明らか。

だけど、この時はさすがに言った。

振り返るとあからさまな姉貴風だったし、これが重要だとは分かっていなかった。

「あんた、まだこんな本読んでるの?!」

野ばらの装丁をされたベストセラーを手に取り、シルバに突き付けた。シルバはしどろもどろになって、ぶつぶつと呟く。

「みんな読んでるよ……」

「荒唐無稽な本じゃない! だいたいこれ、主人公がアドレルを救ったことになってるけれど、アドレルは週報でもみんな知ってる通り壊滅したし、」

「うん」

「それにこの主人公の死神は男性ということになっているけれども、実際に裁きを受けて死神の二つ名を受けたのは女性だったし、」

「たったひとりの女性がキュディスに放り込まれて、しかもアドレルを救っただなんておかしいでしょ! おとぎ話じゃない!」

シルバはしばらく考えた。

「でもさ、共感するんだ。シドはおかしいよ。奴隷を売買するべきではないし、キュディスの怒りを買うようなものだよ。この人はつねにキュディス人を奴隷にしないように頑張っている。ぼくはこの人の助けがしたいな。役に立つかどうかは分からないけれども」

「ばっかじゃないの! あんたなんて戦場にぶち込まれて、死んでしまえばいいんだ!」

シルバは戸惑って、わたしの手首をおそろおそろ握って、ため息を付いて言う。

「そんなの、夢のまた夢だよ。ぼくの仕事は最前線に赴く貴族たちの竜を用意することだけ。そんなことはルナだってわかってるだろ? 卑しい仕事だよ」

いら立ちが芽生えるのは、こいつがおそろしく謙虚だからだ。

わたしたちは、その苦悩する天才にたかっているだけだと、気付くからだ。

「メイファは知ってるだろ?」

知るも知らないも、シルバの工房の統括をしている女の子だ。それを取り出すのはずるいと思うのだが、言いたいことはわかった。

「ぼくは話してわかったんだ。この子は、本来頭がいいんだって。それが特別な事情で発揮できていないと。信じられるかい? 彼女は奴隷として売られていたんだ。遠い東の国の出身だし、言葉もわからない。それでも、ぼくと話せた、言葉は通じないのに」

「でも、買ったんでしょ?」

これはいじわる。

「それ以外方法がなかったんだよ。仲間として迎える方法が買うしかなかった」

ルナにとっては、メイファがシルバに特別な感情を抱いているのは明白だ、と考えるのが面倒くさかったのだが、明らかにこれがいなくなると、シルバの工房は立ち行かなくなることはわかっていた。

「決して奴隷じゃないよ。仲間なんだ」

何かわたしの古傷をえぐるようであるが、罪を犯したのはわたしだ。贖罪のために死にたくなり、辛いとしか言えなくなる。わたしがシルバを奴隷だと思っていたことは事実であるし、否定するすべがない。それを責めることをしないのは彼の計り知れない寛容さであるし、そこで生かされているのを感じはする。

かれは得体が知れないほど広大だった。

「でもさ、こんなに面白い人たちが集まってボルニアに抵抗すれば、なんかできる気がしないかい?」

楽観主義とは言わない。

シルバの思考は未来に対して太陽のように明るい、現実主義者である。それは死神リニーという現実主義者の権化のような天才軍師を得て、開花していく。

シルバはたしかにあらしにあこがれていた。

自分の力がどこまでか知りたがっていた。

「奴隷制が未だにはびこっているのは、機械が発達していないからだよ。ルナもわかってるだろ? 鉱山で出水したときそれを組み上げるポンプがあれば、人はいらぬ。人が死ぬかもしれない危険な作業だ。石炭の蒸気機関があれば、こんな問題にならない」

シルバの視線は強く、言葉に困る。

「そうだけど、まだ石炭の内燃機関の排気問題が解決してないの。構内で燃やすと、酸素がなくなるし、煙がひどいわ。炭鉱中に毒ガスを撒くようなものなの」

「うん、そうだね」

しばらくシルバは考える。

「こうしたらどうだろう？ 蒸気機関は坑道の外に置く。そして坑内にはモーターを置く。そして蒸気機関には発電機を繋いで、その電力を構内のポンプに送る」

ルナはしばらくなるほど考えたが、あることに気づいて眉をしかめた。

「それってさあ、発電機のモーターとポンプのモーターの2つが必要ってことでしょ？ どんだけお金がかかると思ってるの？ モーターは高いのよ？」

「奴隷を買うより安いんじゃないかな？」

冷静に検討してみると、ほぼトントンだった。

「まあ……」

「だったら人が死なないほうがいいよ。ほら、こっちの方がいいじゃないか」

この熱意がうっかり惚れ込んでしまう理由なのだ。

「だったらさあ、あんた、それやったらいいじゃない？」

「え？」

わたしは椅子の背に持たれ、背伸びをして天井を見上げた。

「お金必要なんでしょ？ そんなのわたしが調達するから、あんたは好きにしたら？」

「ど、どういう、いみ？」

反った背を戻して、思わずにやにやして、シルバを見てしまう。

「その心意気を買ったって言ってるの、鉱山につぐくらいあるでしょ？ やりなよ」

まあはっきりいうとこいつが本気になったときには、だいたい回収できることは長い付き合いでわかっているし、まったく回収の見込みが立たない研究者たちに罵倒されるのは、もう慣れっこになっているし、その蒸気機関をわたしがやってもいい、とさえ思っていた。最近触れるのはお金の書類ばかりで飽き飽きしてはいるのだ。

「だけどさあ、利益の8割は渡してよね、利益よ？ 売上じゃないから、安心して。周辺を黙らせるにはそれくらい必要なの」

「暴利だよなあ……」

「あなたに渡るお金は文句ばかりの研究者からぶんどってくることで生まれるの。その口うるさい連中を黙らせるには、お金が必要な。汚い仕事だなんてことはわかってる」

「あ、あの、隊長！ この女に譲歩する必要はありません！ すべての利益を稼いでいるのはうちなんですから！」

シルバは突然割り込んだ異国のうつくしい工房長を見て、困ったように眉をしかめる。

「メイファ、お金の話はルナに任せているんだよ。必要なときにお金が来なくなったら困るだろう？ メイファは硝石を買うお金がなくなったときにそれを用意できるのかい？」

たぶんこの子は、わたしをライバルとっていて、自分のほうが魅力的だと思っている。わたしは正直、自分の研究成果の方に興味があって、自分の外観にはまったく興味が無いのだけれども、張り合う気は一切ないと言っても分かってもらえない。

容赦なく分かりやすい方法で決着をつける。

「50万グロアはかき集める。だいたい出資してくれるつてはあるからさ」

「たすかるよ。面倒ばかりでごめん」

「ちゃんと稼いでよ？ 出資者が大儲けできないともう次はないのよ？」

結局、わたしの取り分は6対4になる。

数字にしてみると2倍のお金がシルバに流れたことになる。結果的にシルバの事業には大量の金が流れ、世界初の砲兵団を整備する資金になる。

そしてそれがシドを守った。まさかこんな思いつきで決まった事業が当たるなんて。

4.

わたしが初めてシルバにあったのは、薄暗い小雨の日だった。

シルバは孤児院から引き取られてきた子供で、兄はシルバに炉を担当させるつもりだったよう。幼いわたしに知る由もないが、高齢の炉の主が徒弟を欲しがったのだろう。

それで遠巻きに見ていたのだが、いつもあちこちにやけどの跡があったのを覚えている。かちん、かちんと鉄を鍛えるのは重労働だし、ひよろっとした子がいつまでもつのかと心配したのだが、おそろしい粘り強さがあって、結局は今に至る。

「あんた、いつまで続けるの？ こんな奴隷じゃない。文句ぐらい言わないの？」

わたしがみかねてそう言ってしまったのは、世界をよく分かってなかったからで、シルバはしばらくわたしを見た後に、躊躇していった。

「ぼくは運がいいんだ。流行病にもかからなかったし、親方はぼくを実の息子だと思ってくれた。だからここが家だし、ぼくの家族はここなんだよ。炉の前なんだ」

事実、この親方はシルバを実の息子のように自分の知るすべてことを仕込んだ。

今になって思えば、シルバがひとり立ちできるだけのものをすべて植え付けようとしていたのだろう。ただそれは幼いわたしには虐待のように見えて、どうしても自分がどれだけ恵まれているかを考えさせずに、ひどいことだと思っていた。

「あなた、ちゃんと給金もらってるの？」

「ないけどさ、住むところも食事もあるからさ、必要なことは全部もらえるんだ」

シルバが卑屈に見えるのは、わたしが特権階級にいたからだと今は分かるのだが、それは少し大人になってから。いまになってはいかに間違えていたが分かるし、シルバはシルバなので、その作ってしまった関係を恥ずかしく思う。

自分を消し去ってしまいたくなるほど。

ただシルバは優しく、どんなにへんてこりんなことを言っても、だいたい普通に受け止めてくれる。それがわたしを大胆にした。

わたしが書いた、一通の文章で何もかもが始まった。(23)

「クリフォードへの取材依頼」という名称で当の本人のクリフォードが語ることになるわたしの手紙は、ひかえめに言ってシドを変えてしまうほどのインパクトがあった。わたしはパルの実妹で、もうちょっと自分の影響力の大きさを考えたほうが良かったかもしれない。

兄の高弟の、竜狩り用の銃を作る工房に見学に来ませんか？

ルナとしては、どこに出しても問題のない工房であるし、もしかしたら幅広い週報発行者たちの人脈の中に資金の出し手はいないだろうか、と思ったのだ。

あの脳天気な者たちがどうもこれは取材すべきだと嗅ぎ分けて、即座に記者がやってきた。出会うと素朴な印刷業者で、あの人たちはよくげらげらと笑った。食いつきが良かったのは工房の奇奇怪な機械で、これで鋼鉄の直管を作るのだと説明すると、同伴の銅版画家が素早く姿を記録していった。

ドライゼ銃にはまったく触れていないのが片手落ちだったけれども、それは不幸中の幸いだ。このときにドライゼ銃を世の中に周知すべきではなかったし、爆発的にシド中に広まる恐れのある週報には載らなかった。

「わたしが担当になりました！ 社主は別の取材に忙しいのです！ ご勘弁ください！」

それは元気だけはいい小柄な女の子で、はきはきとした笑顔が印象的だった。これがあのシド全土に支持されている週報の記者かとは思ったが、どうも野ばらのベストセラーを書いているのはこの子ではないっぽい。肩透かしだったし、本物に会いたくなかった。このときはその社主が来るまでもないと判断されたようなのだ。

仕方ないから塩レモンの特別に冷やしたものを出し、たぶん好きそうだとわたしが勝手に思って、はちみつをお好みで入れてくださいと添える。その蜂蜜が大好評で、何杯入れたかわからないくらい注がれて、恐ろしいほどの甘さになっているであろうと思われるカップの中身を想像して恐怖した、喉にはいいかもしれないけど。

それでもこの蜂蜜ガールはまったく怯むことはなく、

「リラです。まず聞きたいのですが、この技術はシドをどう変えるのでしょうか？ 兵器の革新ですよね？ となるとボルニアとの衝突をもう予定しているのでしょうか？」

「ま、まって……、なんで、ボルニアと戦うことになっているの？ この工房の目的は、騎竜兵を増やしたい貴族たちの、竜を用

意することなの。なんでこの技術を使ってボルニアと戦わなければならないの？ 銃は人を殺すためにあるものではないの」

リラはきょとんとする。

「だって竜を無力化できるんですよね？ ボルニアを無力化できるのではないですか？」

この言葉はたしかに本質をついていたが、飛躍しすぎている。

そんなかんたんな話じゃないと言うことはできるかもだけでも、この子はあさましいぐらいには積極的で、なんでも聞いてやろうと瞳をらんらんと輝かせていたのを見て、この子がなぜ銅版画家同伴で派遣されたのか分かった気がした。

たぶんこの常人ばなれした、思考の飛躍がこの子の最大の武器なのだ。

それで不意を打たれて、つつい彼女ペースで取材が進む。

「ルナさんは、この工房の監督をしているんですよね？ じゃあ、何がほしいのか教えてください。やっぱりお金ですか？ それは理解できるのですが」

それが以外はないだろうとは言わない。ルナには無数の研究資金で苦痛を味わっている開発者の姿が浮かんで、なんとはいか考える。

「わたしは、わたしは配りたいの。どの研究も結果が出ないと切り捨てられるべきではないの。どれも大切だし、たったの3年で切られるべきものなんてたったの一つもない。それを守るためなら、稼ぎ頭を犠牲にする。一生償えないひどいことをしても」

リラはまたきょとんとした。

「パルさんの工房には期待されている方がいるんですよ、だからちょっと見てもらえないかって。異例なんですよお、こんなこと」

ルナにはだいたいのからくりが分かってきた。

(面倒な筋に目をつけられてるなあ・・・)

資金の流れを見ていればだいたいそれがどこのかの見当がついた。

「ルナ！ あれ、お客さん？ どうしたの？ 出資者？ あのさ、蒸気機関をルナに任せたいんだけど、やってくれるかな？」

申し出は願いどおりだけれどもタイミングが最悪だった。

遠ざけていたのに、面倒くさいのがやってくる。

「し、シルバさんですよ！ クリフォード社のリラです！ お会いしたかったんです！」

「は、はあ。」

食いつく速度は猛禽のよう。

「る、ルナ？ どなた？」

「週報の発行者・・・」

「ああ、すみません！ 来てるなんて知らなくて！」

「いえ、構いません！ 本来は社主が来るべきだったんです！ それで話が見えないのですが、蒸気機関をルナさんに任せるとはどういうことでしょうか？」

シルバは、ようやく困難な状況だと察して、しどろもどろで説明をしようとする。

「あ、あの、ルナがシド随一の完全蒸気機関の研究者だとはご存知ですよ？」

リラは戸惑う。

「そ、そこまでは」

「蒸気機関の研究でルナを知らない人はいません。今は研究に没頭できない状況なのですが、サウスの技術を見つけてくることの関しては天才です。ほくもその恩恵に預かってますし、サウス語をネイティブに読めるのです」

きわめて正確に表現されると、わたしはつまらない。

「だから、その専門家に発注するのがおかしいことですか？」

リラはためらってから、白旗を上げた。

「どうも、役不足だったようで」

愛想笑いを浮かべる。

シルバはしばらく考えていたが、ルナの方を向き、

「香草茶を作れるかな？ あれはとても美味しい」

ルナが入れ始めると、シルバは改まった。

「ルナのほうが研究者として優れています。ほくは本当につまらない方で、えーと、リラさんでしたよね？ ルナの作るものを見て欲しいな。飛ぶようで、どう表現していいかわからないよ。神がっているんだ」

正直どう反応していいのかわからなかった。

お茶葉を蒸しながら、香りを部屋に満たしていく。

完全蒸気機関に関しては、たしかに自信がある。

ただ、これは果汁酒じゃない。誰もを酔わせるだけの実力がない。

お茶として注ぐと、椀が温まった。

リラはそれを飲み、異国のお茶ですねと、満足そうに言う。

「おいしい……。こんなにおいしいなんて、ルナさんよりもすごい人は出てこないのですね」

「はい……」

シルバはそういった。ルナは思いついて聞く。

「あの、リラさんは、もしかしたら知りませんか？ 北方大陸を駆け回っていることだし、古いダマスカスって、現在の地名ではどこですか？」

リラは不意をつかれて、うんうんと考え始め、しばらく考え込む。

「あー、いや、聞いたことはあります……。でもどこかは、うーん……。クリフォードさまなら即答すると思うのですが、えーと……」

苦しそうに唸る。

それから頭をかきむしって、やけくそ気味に言う。

「シャビです！ たしか、シャビ史を読んだことがあったような……」

自信なさげに言う。

ルナは立ち上がり、シルバの肩を叩き、じゃあ、言ってくるから、と捨て台詞を投げる。シルバが啞然としているのをよそ目に、セレンに行くわよと声をかける。

「ちょ、ちょっと待って下さい！」

これはリラだ。

「間違ってたらどうするんですか！」

ルナは気にもせずに、

「5%もあってたら幸運のうち。あなたはこの世の中が100%あっているとでも、思っているの？ 幸運の神様は飛びつかないと逃してしまうのよ?!」

セレンは律儀にも旅装を整え始め、案外この娘とは相性が良いのかもとさえ思えてくる。

「ラスペですか？」

「まずはね。そこからシャビへ！」

5.

ルナは結局来た道に戻り、ラスペへ向かう。

内海を通る航路はシドの首都経由だし、シャビはラスペの東方の東岸諸国のさらに向こう、大きな島国に全世界へのジャンクションがある。トランの浮遊船団が中継地点にしている商都だし、ラスペからの航路もある。

そうになると、ぐちゃぐちゃと雨季が過ぎたばかりの泥の中を歩き、山塊を超えて、湿度の高い山道を歩くしかない。騎乗用の竜ぐらい用意すればよかったのだけれども、ルナは工房中のコストを管理している都合上、贅沢はできないのである。

「ニホには告白しなさいよ」

「またそれですか。興味ないんです」

セレンは冷たい。

正直ここまで言われると、どうしたらくつつけられるかしかが興味がなくなる。

「ニホが言ってたわよ、セレンっていい名前だって」

「からかっているんですか！」

うん。それしか興味がない。

「だって、ニホが言ってたよ？ セレンの声が好きだって。コロコロと高いセレンの声が聞こえると、居ても立ってもいられないって。あなた普通に言えば、ニホに溺愛されるの。わかる？ そういう意味？」

シルバとのことを思うと、複雑すぎるのだけれども、いったいシルバはどう思っているのだろうと考えるのは、わたしには難しすぎた。

「お、お金がほしいんですか？」

「ど、どうしてそうなるの！」

「だって、ルナさまの仕事はそれじゃないですか！」

たしかにわたしは、シルバからお金を絞ることを仕事にしている。それが唯一の使命で辛いことは否定しない。でも、わたしはシルバのお金がほしいわけではない。いや、欲しいというよりは全部強奪している。実行犯はわたしだ。

「たしかにさ、全部認めるけど、シルバに使う分は残そうと思っている。あいつから全部取ろうとは思わないよ、だって理不尽じゃない。だからダマスカス鋼の正体が知れるならばどこにでも飛ぶ。しょうがないでしょ？ サウスの文献に書いてあるんだから、ダマスカス鋼って。一切の助けさえせずに、むざむざ金を生む鶏を殺すの？」

セレンは考える。

「わたしにはわかりません。ルナさまは、高級すぎるのです。だってシルバさまを助けてばかりで、迫らないじゃないですか！ 全部握っているのに、脅さないなんておかしいです！ 好きなんですよ！ そんなにお綺麗なのに！」

いろいろ凶星を言われて、本音が出た。

「シルバは外見には興味ないの！ それがいいの！ わたししか見てないの！」

わたしは自分を戦友としてみってくれるシルバがたまらなく好きだった。

一緒に戦っている自分が幸せだった。

セレンはしばらく立ち止まり、トボトボと歩を進めるルナを見た。

「あ、あの、ごめんなさい・・・」

「謝らないで。いつものことだから。こんなので心が折れてたら仕事にはならない、ラスペについてからが地獄だから、覚悟してよね。外観でしか評価されない世界は地獄だから。わたしは慣れてるけど」

ラスペについてまず確認したのはトランの浮遊船団のスケジュールで、どうも数日後に大船団がやってくることが分かる。しかし、その船団はタルボットギルドで、トランの5大ギルドの中で1番こすっからいギルドとして知られている。

もちろん重要な中継地であるシャビには寄港する。

ラスペのタルボットギルド支部に、顔を出す。

「ああ、ルナさんじゃないですか！ なにかお仕事ですか？」

「こんちわ！ 久しぶり！ 急用があってね、シャビに行きたいの。もう少ししたら、船団が来るんでしょ？ 乗賃は弾むから、なんとか押し込んでもらえないかしら？ 2人」

トランのギルドの案内人はだいたいへらへらしている。

精鋭は商売をしていて、ここにいるのは下っ端だからだ。

「50グロアでどうでしょう、二人分の乗賃ですよ？ すいませんね、暴利でしょう？ ギルドの規定の乗賃なんです」

しめたとあって、突っかかる。規定料金を出してくることはじめから読めていた。

「あなた達はわたしたち以外の荷物を運んで儲けるんでしょう？ たった、えーと、セレン、体重いくつ？ ああ、たかだか100キロ未満が増えて、経費が増えるの？ そもそもトランの技術は、わたしたちが再現するからいつまでも天下があると思わないでね？ この際恩を売っておきなさい」

これが有効なのは、わたしがお得様だからだ。

それで乗賃は12グロアになる。

まだ高いけれど、シルバ様々である。いくらでもこれから稼ぐと有望視されると、交渉は有利になる。

脚は確保しても、面倒は大量にある。

兄の屋敷に帰ると、ばあやに取り憑かれる。

「ルナさま！ 面会の依頼が殺到してしまして！」

手紙を受け取るとうんざりとした。だいたい想像つく面倒ばかりで、中でも一番面倒そうだったのはわたしに惚れている貴族で、だいが金があるので無下にはできない。

「会いますけど・・・」

「お嬢様、ご自分をご大切に」

んなこと、わかってるよ。

「会うと言ったんです。そこで何をするかはわたしの仕事でしょう？ どうなるかはわたしが決めます。それで不満？」

「いえ」

「じゃあ、黙ってて」

ルナはその貴族との会食を設定して、とりあえず評判のいい料理人を当てる。

シドに景色のいい名店はないけれども、だいたい格が高い料理人は決まっている。それに景色のいいロケーションを組み合わせる。あとはだいたい料理人がなんとかしてくれる。

そこはオートマチックだ。

たとえば蟹が好きだとわかれば、蟹だという。

この客はよく知っているのだから、蟹で決まる。

ただ、面倒な客で、新鮮な蟹しか好きでないのだ。

「新鮮な蟹蒸しでね、1時間以内の蒸しは禁止」

なんで、こんなことをしているのだろうとはいつも思う。

「ルナさま！」

さまと言うな！ ばっちい仕事の棟梁みたいじゃないか。

「柑橘も添えたらどうでしょうか？ お屋敷の料理人が長く考えていた提案なのです」

「それは、なにを言っているの？」

ばあやはしばらく迷って、蟹肉に絞るのだという。

しばらく考えて味を想像すると、だいが合っていた。

「じゃあ、柚子で。魚醬に合わせて。あとは料理人に任せるから」

ああ、こんな仕事してしまっている。

わたしはシルバのために、資金が必要だ。

こんなに露骨な、資金集めを絶対にしたくない。

金を配っている工房を訪れると、だいたい恐れられる。

「ルナさんじゃないですか！ どうしたんですか？！ なにかうちの工房に不足がありましたか？」

不足はいくらでも語りたかったが、少しでも貢献できる目がある限りは無碍にはできない。わたしはその恐ろしく赤字を垂れ流している工房に用があった。

「電動モーターの発注をしたいの。とりあえず、試作用に2つ。発電用と動力用。モーターは作れるわよね？ 大口の話になりそうなの」

その工房主はいたく感動したようで、言葉を失う。

「利益はあなた達で研究資金に使っていいわ。全部あなた達のものよ。ただ初号機の性能で採用されるかどうかは決まる。うまく行けば数が出るから。最高のモーターを作っちゃってちょうだい。繰り返すけど、これで研究資金を稼いで」

ルナが巡っている稼げない工房にも、そこそこイケている工房はある。その失敗も含めて数百なので、だいたい良さそうな所は

ルナには見当がつくのである。

「十日後には仕上げてね！ 忙しいの！ ボーナス払うから！ シャビに飛ばないとならないの。帰ってきた時に仕上がっているのが望ましいの。分かる？」

その工房主はだいぶ覚悟を決めて、無言で頷く。

こういうやつが信頼できるのだ。それから、ポンプ屋に立ち寄って、蒸気機関のポンプが失敗した話をする。

「あれは、駄目だったでしょ？ 坑道で石炭をたくと坑道の酸素がなくなる。そうすると坑内の奴隷が死ぬ。だけど新しいポンプを考えたの。蒸気機関は坑外に置くの。それを発電機にして、坑内のポンプを動かす」

ポンプの研究者はだいぶ考えたが、

「モーターはどうするんですかい？」

「さっき、バーナードに発注してきた。蒸気機関はわたしが作る」

ポンプ屋は訝しげに聞く。

「それで利益は出るんですかい？」

たぶんモーターが高い事を言っているのだ。

「それはわたしの仕事ね。高く売ってくればいいでしょ？ あなたたちが損するような取引はしない、だから安心して。それで得た利益をは全部研究資金にしていよいよ。こっちに上納する必要はない」

これできっちりと金銭が合う。

シルバに4割取られるのは厳しいが、蒸気機関を暴利で売って、それで賄えばいい。

となると、蒸気機関はフルスペックの最上級を出さないとなあ。

なんかいいネタあったっけ？

わたしの工房なんてあったんだと思出すのは、そこに来るのが半年ぶりだからで、ラスペの下町の断絶した貴族の元館にある。この周囲にしてはめずらしい電力線を引いていない屋敷で、工房が息を吹き返すと蒸気機関がものすごい黒煙を吐いて、発電を始める。

「ルナさま！ お久しぶりです！」

顔を見せると、各工房に援軍として送っていた従事が帰ってくる。

「特急で蒸気機関を作るわよ。わたしは数日しかいられないから、そこは徹夜だと思ってちょうだい。日が無いの。シャビに飛ばなければならないの。図面書くから、シャビに行っている間に仕上げて。テストと最終調整は顔出すから」

部品数にして数百の蒸気機関を数日間で作るなど気が狂っている。

「とりあえず、基本となる部品から作って、ネジとか歯車とか。めったなことでは変わらない部品から。難しい所はおって設計するから。あと材料は最高級のものを使って。とにかく故障しないことが大前提なの。これはモーターとポンプの工房にも言っておいて。この装置は鉱山用のものだから壊れたら、直しに駆けつけなければならなくなる。鉱山は山奥にあるの。ちょっとしたリード線の破断ぐらいで、山道を数日登りたい？」

ルナは方針を出すと、机に向かって、サウス語の写本を片っ端から漁る。

蒸気機関のトレンドは理解している。シリンダーを増やす方向なのは分かるのだが、それを無駄なく連動させる方法がわからない。しばらく考えて、シルバに助けを求めたくさえた。

「考えてくる」

ルナはそう言って、館外に出る。

(あ、そう言えば、蟹伯爵、めんどいなあ)

ラスペ一流の料理人の料理は前菜から刺激的で、パトロンになって欲しい面倒な貴族は上機嫌だった。ワインが注がれると、すこし酔ってセクハラまがいのことを言い、それぐらいは気にしないけれども、世間話をして、だいたい利益の源泉になりそうな事物たちの話をする。

それは、工房の現状であったり、だいたい儲からなそうなところを紹介するのだが、飽き飽きしてくると、本筋に入る。

「実は、お金になりそうなおところがありまして、出資をお勧めするのですが」

表情が少しだけ微動する。

「シルバくんは関わっているのですか？」

「はい、本家本元です。これをいい出したのはシルバです。だから、」

自信がある。ルナは鮭のムニエルをナイフで切って、口どもる。

「バカバカしい話に聞こえるかもしれませんが、彼は鉱山の出水で奴隷が死ぬのが我慢ならないのです」

表情が動く。

「奴隷は安くないですからね」

「それで、機械で代わりができるのであれば、安くなるのではないかと。機械は文句を言いません。病気もしません、あ、いえ、故障すれば修理するものが駆けつけます、暇ですし。それよりもうちの工房の物は壊れません」

その貴族はしばらく考え、いくらですか？ と聞く。

だいぶ盛った価格を言うと、しばらく考える。

「うちで試してもいいでしょう。ただ、噂は広めますからただでお願いできますか？」

こすっからい。

「本来10万グロアのところを、長い付き合いの機微でただならどうでしょう？」

これができるのはシルバがキャッシュを稼いでいるからだ。

「本来10万グロア」を差し込むために、この交渉はある。たぶんこの浅はかな商人は、自分は10万グロアを浮かせたと喧伝するはずだ。そうすると正価が10万グロアになる。

感謝してよねと誰もにいいなくなったけど、誰もこんなことは聞いてくれない。

「これは商売上手なお嬢さんだ。あなたの美貌に乾杯して、了解することにしましょう。今夜は長いと思っていいのですか？」

「今夜は忙しいので。蒸気機関を任せられました。最高のものを仕上げなければ」

なぜだかわからないうちに、商談はだいたい成功し、うんざりする面倒、酒に付き合うという面倒だけが残った。まあ酒は強いけど、それは自慢にはならない。だいたい酔い潰すのがミッションになる。

出て来る料理に話の花を咲かせながら、とにかくお酌をする。

恐ろしくつまらない仕事だよねえ。

シャビに向かう船には常にバラの花束がある。

それはシャビが、自国の名産を常に来港者贈っているからであって、シャビ行きが華やかな理由になっている。その香りを嗅いでいると、シャビに探していた楽園がある気にさえなってしまう。

シャビに向かう船団は定期便で、ラスペとシャビの間を往復している。2つのジャンクションをつなぎ、荷をおろして、荷を積み込み、また帰ってくる。

シャビにダマスカス鋼があるかどうかは、まったくわからない。

それでもぜんぜんお金にならないなあと考えると、だいぶ正気に返る。

そもそも銃の銃身にダマスカス鋼が使われることを、だれも求めていないのだ。

書面に書いてあるから、ダマスカス鋼を探しているだけなのだ。

こすからいタルボットはだいぶ慣れていて、茶も出さない。

有料なのだ。

それでしばらく歩いて、有料の茶をもらう。セレンは首をかしげる。

「料賃は払っているんですが・・・」

「タルボット舐めないで。飛べるだけラッキーでしょ？ 彼らは商売人なの。お金稼ぎが商売なの。飛べたらいいじゃない。お金が重要なの？」

セレンは諦めて、ため息をついた。

「でも、茶が5グロアっておかしくないですか」

それは正しい。たしかに暴利である。ラスペであれば無料で飲めるかもしれない。ただ、この価格は、それがトランの浮遊船乗りであっても共通だ。わたしたちが特別に暴利を貪られているわけではない。トランの合理性は学ぶところが多くて、ため息をつく。どれほどわたしたちシドのほうが不合理なのか、と。

「変えてしまう？ 不条理を全部取っ払う？」

やけそ気味に言うと、セレンは誰がやるんですかと聞く。

「セレン」

冗談は言わないでくださいと叫び、わたしにはたったひとりしか頭に浮かばなかった。

「野ばらのあの人はどうかな・・・。わたしは全否定したけど」

「て、テロリストじゃないですか」

うん、否定しない。

彼女はいつもめちゃくちゃすぎて過激で、主流に落ち着くとは思えない。ただ、シルバが、あのなんにもないやつが、落ち着かせたらどうだろう。わたしにするように、その激高する情熱を落ち着かせたらどうなるんだろう。

「あの人は大量の借金があって、交渉しやすいわ」

「ルナさまは、お金の話ばかりですね」

うん、そう。

「でもどうかな、もし出資してもらえれば、いくらでもお金にしてみせると言えば」

セレンはしばらく考えて、ヒステリーを起こす。

「わけがわかりません！ お金がないんですよ！ なんでお金が出てくるんですか！」

ルナは魔法の言葉を言った。

「信用があればいくらでもお金は出て来るの。絶対に返ってくると思われていると、借金は借金じゃない、わかる？ わたしが借りたら、絶対に返ってくるの。これが信用。お金を借りられる秘密は全部これ。彼女には恐ろしく大きな信用の塊がバックに付いているの。だから変えられる可能性があるとするれば彼女だと思う。誰だか分かる？」

さあ、とセレンは首を傾げるのを見て、おもむろに言った。

「大公よ。彼女は大公の古い盟友の姪なの、ただ一人の生き残りなの」

死神リニーが歴史の表舞台に現れ始めるのは、シドの絶対的な権力者である大公が、前線指揮官に命じていたからで、特異なシルバを長とする組織になるまで、だいぶ長い変遷をたどる。

城郭都市サイルを中心にする最前線の経緯が、一体誰が何だったのかを、説明するのも困難になる。サイルがどこだったのかさ

えわからない状態で、本来サイルと名付けられた太守を置く都市のことだったのか、離宮とも言うべき旧都の要塞のことなのか、それとも、これを包含したすべてが大サイルだったのか。それがわからない。

戦いは同時多発的に起こり、何がサイルを守ったのかわからない。

たぶん、ロットの整えた守りがサイルなのだろう。

そうになると狭義のサイルになる。

そもそもサイルを守るのは、ザブンテ軍の残党が主力という異常な私兵集団であって、それにシド蛮族の首竜の傭兵と、何故か絡んできた正規軍の3すくみで運営されていた奇妙な軍だ。

リニーが優れていたのは、その3すくみを完全に統御していたことで、彼女の軍師としての評価が確立されたのはだいたいこの時期だ。国境線でのファーストコンタクトは、ボルニア側は軍神の降臨とはならなかった。これが、初戦をなんとかしのげた唯一の理由だと言う人もいるけど、それでも負った傷は大きい。

シルバの砲兵兵団が、世界を変えはするのだろうけれども、それがボルニアの鉄鎖騎竜兵団と同等かと言われると、鉄鎖のほうに勝っている。それに鉄鎖の次王が組み合わせられたら。あの超人的な機動戦をされたら、崩壊は明らかだ。

籠城しかなくなる。

シャビの港は慣れているのだけれども、タルボット同伴ははじめてなので、いろいろと戸惑う。タルボットは浮遊船から大量の荷をおろして、それを勢い良く市へと運んでいく。

シドで仕入れたのだからたぶん香辛料だろう。

たとえば、ジャングルでは恐ろしいほどの安値で買われるキノコ。これが都市に運ばれると恐ろしいほどの高値で売られる。なんでも薬効があるらしい。それでトランの浮遊船団は儲ける。

シドの船団が劣るのは、船足が遅いということになる。

同じ船でも海水の抵抗と、空気の抵抗では天地の差がある。

これが同じ風を受けながらシドの船足が遅い理由で、しかも上空のほうが海面よりも強い風が吹いているのだ。

それでもシドと帝国との航路が維持されているのは、トランが5ギルドある船団同士で争い合っているからだ。トランの敵はトラン。しかしシドには敵がない。唯一あるのはシスティアという味方の海洋国家だけで、システィア人の傭兵はトランと戦っても恐ろしく強い。システィア流の剣術は超文明の技術に頼っているトランに対して強く、簡単に制圧をする。

もちろんそこにキュディスが入ってくるとよくわからないのだけれども。

トランはよくわからない国だ。

荷では競合しているのだけれども、トランの浮遊船団が恐ろしく暴利で、シド経由の海路のほうが安いことになっている。トランがシドの航路を潰そうと思えばできるのだけれども、空路の覇権争いをしているのでその資金のために利を稼がなければならず、あきれほど海路が安くなる。

彼らは荷の行き来のほとんどが、荷の積み下ろしと、荷の積み込みに左右され、たどり着くのにかかった時間に左右されないことを理解していない。

みすみす見逃してもらっているのは、ありがたくはあるのだけど。

多分トランの失敗は、利益を上げるためにえげつなくなりすぎる点で、乗車中のお茶が5グロアとかありえないことを言う部分にある。シドの帆船では無料だし、トイレにいくたびに高額の賃料を払うこともない。まるで自分たちが特権階級であるかのようになっている、恐ろしい暴利がまかり通る。

タルボットはひどいにしても、ヒングス、ブルークスタ、ライカルのギルドもひどい。

ヒューメリックが唯一残っているまともなギルドなのだが、このギルドは単独航行を許しているので、ギルドとしてのまとまりはない。

トランのめちゃくちゃな覇権争いの漁夫の利を得ているのが、通商国家シドなのだ。

だから、従順にバカをさせておくのが得だ。

シャビに近づくと、荷降ろしの奴隷たちが叩き起こされる。

それは船中を叩き起こすような騒音で、ハンモックで本を読んでいるのも、暴利な茶を飲んでいるのもばかばかしくなる。

「なんなんですかこれ？」

「あー、荷降ろして分かる？ シャビについてからが戦場なの。数千箱の荷を降ろして、また数千箱の荷を積む。もちろんわたしたちはお暇するわよ、お客だし。ダマスカス鋼を探しに来たんだから」

セレンはしばらく考えて、遠慮気味に言う。

「ルナさまは、いいひとですね」

「なにそれ？」

意味がわからずに聞く。セレンは慌てて言う。

「あの、いえ、とてもわかり易かったので・・・、でもわたしを侮辱しなかった・・・」

ルナは考え込んでしまうが、セレンが無学だというコンプレックスを強く持っていることにまで思いが及ばない。

「なに言ってるのよ！ タルボットが暴利だと言ったのはあなたでしょ？ わたしもそう思うし、トランは恐ろしく暴利よ！ 茶に5グロアっておかしいと言ったのあんたでしょ！」

セレンは言葉を謹んだ。

※

上空から見ていたシャビは、密集する街区の中にちらほらとひらけた広場やら寺やらが散在していて、行き交う人々の活気が聞こえてきそうな気さえする。

降り立った広場はトランの船団の船着き場になっているためか人はまばらで、縦横の大通りを覗くと商売の呼び声が聞こえてくる。シャビは石造りの密集した街区と、賑やかなバザールと、荘厳で静かな寺院と、活気ある職人街の都市だ。バザールも職人街も通りごとにその役割が分かれていて、北の市と南の市という大雑把にしか分けてないペネスとは違って、宝飾品の通り、革製品の通りとそれぞれがまとまって商いをしている。

街区はおおよそ住宅街で、それが四方の関と人がすれ違うのもやっとな細い路地とで塊になった地区を形成している。その中には大邸宅もあるが、殆どが庶民の家だ。中庭づくりの家々はそこに噴水と緑をたたえ、どのように水を引いているのかは謎なのだが、清潔な水が流れている。もちろんルナは街区には入ったことはないし、用があるのは街路沿いにあるバザールと職人街なのだ。

「この辺なのよねえ」

ルナはタルボットギルドで買った（買えないのだ）地図を片手に、街路を歩く。

タルボットギルドの話では、どうも鉄を鍛えている工房で、ダマスカス鋼のヒントが得られそうなのだ。シャビはだいたい暑い。それは炉の数のせいではとってしまうほどのんだけど、詳しい人に聞くと、このシャビという巨大な島を通過している海流のせいらしい。それで雨が多いし、バラが育つ理由になるらしい。

「バラってさ、甘いじゃない」

セレンはうんざりした様子で、はい、まあ、そうですね、と答える。

「それなら、ここでじゃがいもを育てたら甘くなるのかな？」

「試してみますか？」

「じゃあ、やってみようよ！ じゃがいもが甘くなるかもしれない！」

もちろん、めちゃくちゃな提案なのだが、突拍子のないむちゃくちゃさは本人が自覚していないルナの武器なのだ。

「じゃあ、じゃがいもを植える農地をご用意頂けるんですね？」

「あ、そっかー。そんなのないなー。いまどんぐらい資金に余裕がある？」

セレンは律儀に考えた。

「50グロアぐらいですかね、もちろんダマスカス鋼の交渉用は別に考えていますが」

紹介された工房にたどり着くと、見慣れた光景が広がっていた。

結局工房は、ペネスでもシャビでも変わらない。

(浸炭法だ、どこでも同じなんだなあ、これは)

「タルボットギルドの紹介できました。わたしはシルバ工房の会計を担当しております、」

じろりと見られるのを、はははと照れ笑いで返す。

老舗だと聞いてきただけに、初老からいつ亡くなるかわからないお爺さんまで、熟練の職人ばかりが無心に鉄を叩き続けている。その姿は尊いようにさえ見え、昼過ぎから深夜まで無言で見ていた。

工房の音はシンプルだ。

一定のリズムに従ってカチンカチンと叩く。

そして炎の音。

ごうごうと鳴る炎の音を聞いていると、安らぎさえ感じる。

セレンはいらいらとしていたけれども、小声でよく見ておきなさい、という。

たぶん若いと、その人たちがなにをしているのかを、ひたすらに肌で感じることに価値を感じられないのだ。わたしは身体を溶かして、その工房の空気に染めていくのがたぶん好きなのだ。それで信用できるかどうか分かる。

深夜になると、老人たちは片付けを始め、思い出したようにわたしたちを見る。

「あしたは、7時から始まります。また来ますか？」

笑うと、おかしなお嬢さんだと笑われる。

「ルナさま、全然なにもしてないじゃないですか！」

セレンがぶりぶりとして吐き出すのを、先に荷を預けた宿泊先に街路を歩きながら、そう言えば夕食食べてないね、という。忘

れていたのだ。

「忘れていました」

「じゃあ、なに食べたい？ もうだいぶ遅いし、屋台ですます？」

「あ、いえ」

セレンには珍しく抵抗する。

「じゃあ、海鮮の串焼きにでもする？ シャビの食べ物はだいたい辛いけど」

「辛くないほうが・・・」

ルナはうーんと考え、

「じゃあ、野菜出汁の海鮮麺かなあ・・・。いい店知ってるよ！ 屋台だけど・・・」

「・・・じゃあ、それで・・・」

8.

数日経つとだいぶ馴染んで、だいたい工房がどう動いているのかが分かってくる。

それでも大人しくしていると、さすがに気にし始める。

「お嬢ちゃんたちは、シルバさんの工房の方なのでしたよね？」

そろそろ、帰りの便も近いし、本題に入ろうかと思っていた矢先だった。

ルナはゆったりと考える。

「ええ、まあ、小さな工房ですが」

老人たちはお互いに目配せをし、一人がゆっくりと口を開く。

「シドの方ではずいぶん名の通った工房だと聞いていますよ。あれから他の工房などにあたってみたのです、シルバさんの工房を知らないか、と。そうしたらずいぶん稼いでいる工房というではないですか、それでピンときたのです。何か相談があつてきたのではないか、と」

なるほどシャビの工房ネットワークというのは情報通らしい。

それはそうだ、なんたって全世界の浮遊船が中継地とする一大ジャンクションなのだ、この都市は。ルナはおそろおそろ聞く。

「ダマスカス、鋼を探しているのです。ふと耳に挟んだものですから、このシャビの古名がダマスカスなのだと、それで着の身着のまま浮遊船団に飛び乗ってやってきたというわけです。ダマスカス鋼というのは・・・」

「ああ、うちで打ってるのがダマスカス鋼だね」

やっぱりと思うのは軽薄だけれども、気持ちが急くの止められなかった。

「お嬢ちゃん、その話は昼にしませんか？ まだ仕事が残ってるし、もうすぐ昼だ。わしらと一緒に食べないかね？ たいしたものはないけれど」

「はい！」

昼になると老人たちは疲れたというように背を伸ばし、立ち上がって、工房の中央に集まってくる。数人が何処かへと向かい、残りは中央に車座になった。そこに薄く伸ばした円形のパンが運ばれ、それに続いて野菜の籠、ベーコンなどの肉魚類、そして香辛料、お茶が運ばれてくる。

「質素なものですが、好きに食べてください」

お茶が注がれ、座った先に敷かれた布の上にカップが置かれた。

老人たちはめいめいにパンに手を伸ばし、そこに禍々しいほどに真っ赤な香辛料のペーストを塗りつけ、ベーコンを乗せ、玉ねぎとレタスを乗せる。

「あー、そのチリソースはたぶんお嬢ちゃんたちには辛いはずだよ。だからそっちの黄色いの、そっちはそんなに辛くないから好きなように食べてください。それと今日はリーズデルからのニシンの酢漬けが入ったんだ。瓶にあるからそっちも試してくださいな」

黄色いのはたぶんマスタードだ。見慣れた香辛料にセレンは早速手を伸ばし、パンに塗ったくって、ベーコンを乗せ、レタスを乗せる。それを半円に包んで満足気に食べる。

「おなかすいてたんです」

はきはきというのに、老人たちの頬が緩む。

ルナはさすがに礼儀としてチリソースに行くべきかと悩んだが、老人たちが汗をたらたら流しているのに勇気が出ず、マスタードと思わしきものを塗って、それにニシンを乗せ、みじん切りにした玉ねぎを乗せた。口に運ぶと、黄色いソースが思いのほか辛くて、多分からめに調合されたマスタードなんだろうなと思いつつ、それでもニシンと玉ねぎとの相性が抜群で、貪るように食べて茶を飲んだ。

「おいしい！」

もはや茶なのかパンなのか分からないのだが、普段食べる外国人向けにマイルドになっていたシャビの料理よりもずっと美味しく感じた。それですぐさま次のパンに手が伸びる。

「あ、すみません、わたしたたら・・・」

「いいんですよ、いくらでもお食べください、そんなに高いものではありませんから」

許しがあつて、すぐさま次のパンをどうするかを考える。チリソースに行くべきか、いやそれは冒険すぎる。でも同じものばかり

というつまらない、たいへん悩ましい。

しばらく食べていると、満足してきて、老人たちもゆったりと茶を飲み和やかになってくる。すると、工房長と思わしき老人がおもむろに口を開いた。

「ダマスカス鋼を探しに来たと、さきほど聞きました。ですがそうおっしゃる方にはいつも同じように言っているのですが、ダマスカス鋼はシャビで産出される鉄鉱石からではないと作れないのです。これはわしたちにも理由がわからない。試したことがあるのです、何度も。もしお教えした方法で作れなかったら問題になりますから」

「なるほど」

ルナは多分特殊な成分がシャビ産の鉄鉱石には含有されているのだろうと思うのだが、それをいちいち説明するのは面倒くさそうに思えた。

「それで、こうお勧めするのは、鋼板はわしらで作りますからそれを買いませんか？ と。いかがですか？」

「価格次第、ですかね？」

老人はゆっくりと頷く。

「では、いくらまでだったら出せますか？」

ルナはどぎまぎする。

（なんだこの人、手練じゃない！）

そりゃそうだ、シャビのタルボットギルドが紹介する工房だぞ！ 手練でないはずがないじゃないか！ あ、でも、紹介し続けているということは、顧客から文句が来ない工房なんだ。あー、なるほどお。

「で、では、言い値で買います」

「ルナさま！」

セレンがたしなめるのを無言で抑えて、繰り返す。

「言い値で買います」

「ほう」

ルナはすこし落ち着いて、理路整然と話し出す。

「わたしたちは数日この工房を見学させていただきました。その中でわかったのは、この工房は非常に信用ができる工房だということでした。正直に言いますと、もう末永くお付き合いさせていただきたい。長く関係が続くためにはお互いに無理のない価格で合意するのが望ましいと思うのです。わたしたちは最終製品の価格で、いくらでも利益の幅を決めることができます。ですので、まずはあなた様方が無理のない価格をお決めください」

しばらく老人たちは黙っていた。

もちろんルナは、言い値で取引できるのであれば、この工房は何か緊急の事態があった時にわたしたちの工房の注文を優先してくれるであろう、という腹はあった。それに価格が割に合わなければ発注量を減らせばいいだけなのだ。

「わかりました。そうですね、この価格でどうでしょうか」

メモに書いた数字を老人たちは回し、全員が頷いたのを確認して工房長から渡される。

それは思っていたよりも遥かに安い価格だった。

「えーと、鋼板の在庫はありますでしょうか。この価格で買います、サンプルとして持って帰りますので。セレン、幾ら持ってきたの？ どれだけ買える？」

メモを渡すと、セレンは慌てて計算し始める。

「あ、半分は残しておいてね。輸送運賃がかかるから。海路で帰るわけには行かないでしょ？ あのこすっからいトランの船団も流石に荷を見たらふっかけてくるから」

考えてみればシドでは伝説の鋼板であるダマスカス鋼も、シャビでは一般に普及している普通の鉄なのだ。誰も注目していないだけで、ここではそこいらに満ち溢れている。これは一山当てたかもしれない。

「あの、それで鋼板の厚みはどれほどのものをお望みですか？ 在庫には限りがありますので」

「あ、えーと10ミリと5ミリで、在庫ありますか？」

一般的にどこでも使われている厚みを言ったつもり。銃に使うのは10ミリなのだけれど、5ミリを試してもいい。もし、5ミリが使えなくても、他の用途で使えばいい。たとえば蒸気機関とか、ポンプとか、モーターとか。

老人は悩んだ。

「あー、うーん、10ミリは少ないんですよえ、厚すぎてあんまり用途がないので。ですが5ミリならばいくらでもあります」

え？ 一山どころじゃなかった？！ 5ミリで強度充分なの？！

5ミリというのは、鉄材の世界では異常すぎて、少なくとも筒内で爆発させることが日常な銃の世界ではあり得なかった。もちろん、5ミリで済むならば、それに越したことはない。銃が軽くなるし、使う鉄が減るので安くなる。

もし使えるのであればダマスカス鋼は、利益の源泉になる。

常識的に考えれば、ただの鉄の値段のものが、ただの鉄ではなくなる。

これを捉えているのは、シルバ工房だけだ。

ルナには莫大な利益しか見えず、それはもちろん分配されるべきお金であって、配下で冴えない工房が輝き出すのが見えてきそうになった。

9.

ラスペに空路で着くと、ルナは5ミリの鋼板を一枚持ち上げて、それを胸に抱えた。

「セレン、竜車を調達してちょうだい。これ、工房まで運ばないといけないから。わたしは一足先に工房の様子を見てくるから」
「はい」

背丈ほどもある鋼板を抱えて歩く姿は、たぶん異様だろう。

それでも兄パルの工房はそれなりに名は通っているので（儲かってないけど）、後ろ指を指して笑うものはいない。それよりもダマスカス鋼を真っ先に届けてやりたかった。わたしは工房が好きだし、思い描いていたものが形になっていくことは好きだった。

それに設計図を渡した蒸気機関がどう仕上がっているかを見るのも楽しみだ。

胸がすく。

鼻歌を歌っていたかはわからないのだけれども、わたしの工房となっている貴族の旧邸宅にたどり着くと、ウキウキが止められなかった。

「みんな！ 帰ったわよ！ 大収穫！ みて！ これがダマスカス鋼！ びっくりするぐらい安く買えちゃった！ もし性能がよかったらじゃんじゃん使っちゃってちょうだい！」

ハイテンションに啞然とする、工房の面々の間を歩きながら、

「蒸気機関はできてる？」

「あ、ああ、はい、あそこに……」

広間の中央にある設計したとおりの蒸気機関を見て、無骨な機械の表面がピカピカに磨かれているのを見て、わかってきたなと嬉しくなる。

「もうテストはできる？ できるなら河岸に運んで、ポンプと合わせてみるから」

「ポンプの方はもうできていると聞いています」

「まあ、もともと昔使ったやつをちょっと丁寧に作るだけだからね。ハッカビーには、ちょっと儲けさせてやらないと、いい仕事するから。すぐに鋼材を乗せて竜車をよこすから、蒸気機関を運べる準備をしておいてね。それからポンプを回収して、河岸の棧橋に。うちの7番棧橋に。ハッカビーには通しておくから」

手はずを整えると、ふいに工房の職人が聞いた。

「このダマスカス鋼はどうするんですか？」

ルナはしばらく考えるが、うまい方法が思いつかない。

「好きにして。別に転売してもいいのよ？」

さすがに溜飲を下げた。

「技術者ですから、端くれですけど」

「じゃあ、頼んだ。ぜんぶ任せるから、なにに使ってもいいから、でもこの鋼板は自信があるから、おもしろく使ってね」

ルナは簡単に言うが、蒸気機関の第一人者だけに、言葉が重い。

工房の誰もがわたしなど気にもせず、熱心にダマスカス鋼板の特性を測定する算段に入るのを眺めながら、わたしはこの場所が好きなのだという想いを新たにする。

「じゃあ、頼んだから、ハッカビーのところへ行ってくる」

軽く声をかけても誰も聞いていない。

「スイッチ入っちゃったみたい」

それから返す踵で、ポンプ屋のハッカビーの邸宅に向かう。

入ると別案件のポンプの試運転中で、わたしが過去に設計した蒸気機関にポンプを繋いで、たぶん耐久テストだと思うのだが、張り詰めた様子でポンプの音を聞いている。

暗号にも似た専門用語が飛び交い、それを聞いて設計者のハッカビー兄弟が頭を抱えている。わたしはそれをしばらく見ていたのだが、二人のところまで歩いて、声をかける。

「トルクはどの辺まで耐えられそう？」

「え、ああ、ルナさん、帰ってたのですか。新設計の蒸気機関、見ましたよ。でもあの馬力に耐えられるかなあ、ちょっと厳しい

かなあ」

ルナはすかさず言葉を挟む。

「じゃあ、朗報。ダマスカス鋼の製板工房をつかまえたの。ちょっと試してみてくださいない？ サンプルはもうすぐ運ぶから、もしよかったら、なんでも発注してちょうだい。もしシャフトが欲しければ言って？ 径さえ言ってもらえれば、それを用意してもらうから。強度の強いシャフトはほしいでしょ？」

ええ、まあと戸惑いがちに言うのは、精密な加工が必要なシャフトは外注したことがないからだ。

「別に、精度に問題があるなら、ここで直すのは問題にしないわよ？」

ルナは軽いように見えて、独裁者的なプロデューサだ。

サディストとは言わないけれども、押しが強くて、話し相手に何かを押し付けるのを苦に思わない。シルバと不思議な協調関係にあるのは、なにも言い出せない奥手なシルバを、ぐいぐいと引っ張る力があるから、というのは変な見解だろうか。

ハッカビーの工房の少年が、軽く言う。

「じゃあ、サンプル持ってきてくださいよ！ 現物を見ないと、発注もできません！」

ハッカビー弟は申し訳無さそうな表情をしていたが、ルナは気楽に片手を上げる。

「まあいいわ。でも、それを使って大儲けして！ ダマスカス鋼よ！ こんな使ってるの、ラスペでもうちぐらい！」

ルナが特異な地位にあるのは、血の問題もあるのだけれども、工房全体の原材料の流れを全部把握している事にある。本人はひたすらにその仕事を捨てたがっているのだけれども、それをできる人が他になくて、やめられない。

ルナには代わりがない。

たしかに突拍子もない性格をしている。

でも、それが好循環で進んでいるうちは文句も出なくて、代替不能で、ルナはその役割から開放されないでいる。ルナがうんざりしているのはまさにその部分なのだけれども。

「あの、シャフトの径って・・・、いくらぐらいがいいですかね・・・」

わたしが決めるの！？ 少年は怖気づいたが、

「すみません、やはり現物がないと、どうにもならないんですよ」

ルナの表情を見て、申し訳なさそうに、ハッカビー兄が言う。

「あ、ごめんなさい。いま、竜車を手配して運んでくるから。特性テストが終わったら、欲しいものをリストにして渡して。空路で運ぶととんでもない事になるから、海路になるから、試作機には間に合わないわね。でも、量産機ができればそれに交換してもらおうから、それに間に合えばいい。試作機の納品から1月後でいいわ。それまでに、ダマスカス鋼で仕上げたものが出てくればいい」

理路整然というのに兄弟が安堵の視線を合わせた。

「できそう？」

「あ、いえ、現物を見ないと」

セレンが待っているであろう浮遊船の港につくと、荷台に鋼板を満載した竜車が待っていた。セレン一人では搬出は無理だろうだったから、幾ら使ったんだろうと心配になったのだが、どうも賢く周辺の配金している工房から動員したらしい。

話を聞くと、それがダマスカス鋼だと触れ回っていなかったのが玉に瑕で、それでも十分な仕事をしていた。

「テストするから。まず竜車を工房にやって、蒸気機関とポンプを7番埠頭に運ぶ、それはいい？ テストが終わったら忙しいわよ」

「え、えーと」

ここがオーバーフロウの地点のようだ。

そうするともう少し前の地点を探す。

「テストをします。それは7番埠頭でします。そこに蒸気機関とポンプを運びます」

それでセレンは頷いて、わちゃわちゃと動き始めた。

わたしがしていなかったとかサボっていた連絡までいれ始め、お金の交渉まで始める。そこまでくるとわたしはやる事がなくなる。

(ニホと組んだら、いいコンビなんだけどなあ)

工房の有望格はセレンを始め大量にいる。しつこくニホといい仲にしたがっているのは、ニホと組むと良さそうだから。セレンは律儀で細かい数字の計算をさせたら間違いは起こらない。ニホは、大雑把だけれども本質を掴む力だけはすごく、大局観だけは誰にも負けないホープなのだ。

正直に言うとルナはセレンとニホに、自分とシルバを重ねている。

ああ、こいつは不器用だなと、自分と同じだなと思う時に、救いであるシルバを重ねてしまう。セレンはたぶんニホに、自分に

はない才能を感じるだろうと。

「ニホに相談しなさいよ。あなた、ニホを侮りすぎ」

「なんで、そんなに言うんですか！」

さすがに10歳も年齢が離れていればわからない。

わたしが思春期の頃にシルバにどう接していたのだろうと考えてしまうし、たぶんセレンがするようなことしかしていなかったような気がするのだ。

「聞かなくていいから、聞きなさい。誰だっていつも足りないの。一人でできる人なんてどこにもいないの。あなたの良さを褒めようとする、どうしても他の人が頭に浮かぶの。その人と組めばどんだけいいかって」

セレンはためらった。

「じゃあ、ルナさまは、なんでシルバさまと公の関係にしないんですか！」

どきりとして、いろいろと言い訳は思いつくだけでも、説明として説得力のあるものはない。

「あなたは全部見ているでしょ」

これはヤケクソに近かった。

「わたしはシルバを搾取するしかないの！ 罪の意識なんて、もう無限に感じている！ でもこのあの無能な兄の工房群を維持するにはそれしかないの！ どうしたら良いというの？！ わたしがシルバにどう謝ったらいいの？ 謝って、好きですと言えば、許されるの！？ そんな簡単なの！？」

セレンは圧倒されて、それから内省して、考えた。

たぶんこの子は賢いのだ。

「・・・、はい・・・、シルバさまは全部許すでしょう・・・」

それを信じるには時間がかかった。

「・・・、じゃあわたしが言ったら、あなたもニホに告白する？」

「なんでそうなるんですか！」

わたしは冷静なつもりだったけども、冷静なはずがない。それでもしばらく考えて、正直に言う。

「ニホはシルバに似ているの。わたしはシルバが好きだけれども、ニホもいいやつだなあと思っている。それをセレンが助けてくれれば、工房が回るでしょ。リラと話したとき、わたしがシャビに飛ぶわよと言った時に、あなたはそれに備えていた。その時にわたしと同じ考え方をするんだと思った。なんでわたしの後継者と思っはいけないの？」

セレンはひたすらに黙っていた。

「不快？」

セレンは黙っている。

「お金の計算は叩き込んだとは思っているから、会計の能力でセレンよりも上回る人はいないと思うわ。あなた才能あるわよ。数字で間違ったことがないじゃない。あなた以上を見つけるのが難しいの」

ルナのそばにいて、セレンはその数字の正確さがもたらす秩序は見ているのだ。ルナの愛弟子という地位は否定し難いが、それで人生を決めてしまっているのかと思う。

難しい問題だ。

10.

鋼板を満載した電車が工房にたどり着くと、なぜだか歓声がわいた。待ちわびたように顔を出した工房の面々を見ていると、ふしぎな光景に見えてくる。

「なに？ どうしたの？」

「ああ、ルナさま、そのダマスカス鋼の数字を知りたいですか！ 信じられません！ 丁寧に浸炭した鋼材よりも、果てしなく上の数値を叩き出したのです！ 引張強さもいいですし、耐力もいいですし、うかれてひねり耐性も調べてしまいました！」

ルナは理解できずに、工房長の肩を掴んで落ち着こうと言ったのだが、落ち着きが必要なのはルナの方だった。セレンに荷を解くようにいい、それで了解を得たと思ったのか、工房の誰もが群がり始めた。

「ハッカビーにも、バーナードにも持っていくから、全部取らないで！ 発注すればいくらでも運んでもらえるから！ 欲しいものがあったら、わたしに発注して！ ただし、船便よ！ 一月はかかる。それは了解して！」

それで混乱は収まった。

「うちの工房では大混乱だったわ。争奪戦というの？ 性能テストをしてもらったの。その数字がどうもすごかったらしくて」

ルナは疲労困憊で言う。

「どうもお疲れのようで」

ハッカビー弟は気を利かせるが、兄は無言を貫く。

「ポンプは軽い方がいいの。鉄の量が減れば軽くなるでしょ？ 鉱山ではどこで出水するかわからないでしょ？ そうしたら、すぐに運べるのがいちばん。そのためには軽い方がいいの。テストしてみて。サンプル置いておくから。うちの工房の評価を鵜呑みは嫌でしょう？ 信じられる？ シャビでは10ミリ鋼板は使わないというの。5ミリで十分だって。どんだけ強靱なのよ?!」

兄はしばらく考えていたけれども、口を開いた。

「40ミリ径と、25ミリ径のシャフトを。それでテストします。いやですか？」

ポンプはシャフトなのだ。

それで武者震いをした。

なんだ、気付いたらそれなりの工房を抱えていた。

鋼材一つで劇的に変わる、利益になる宝の山が目前にあった。それを活かすも殺すも自分なんだと思うと、その重さに怖くなった。セレンと一緒にあって鋼材を降ろしながら、置いていった鋼材の在庫管理をしはじめると、気が紛れる。

「じゃあ、シャフトは発注しておくから。他に欲しいものがあったら、すぐに言ってね、いつでも回ってくるから、わたし工房を見ているの好きだし」

シャビの工房に発注をするというのはけっこうな手間がかかる。

そもそも数日居合わせただけの工房だし、こっちをどれだけ信用してもらっているのかもわからないし、相手がどれ具合の幅でこちらの要望に応じてくれるのかもわからない。

それでも真剣な儲からない工房の発注に応じなければならないし、わたしはだいたい嫌われているのだ。

「どうするんですか？ なんか誇大妄想だけが発展している気がするんですが」

セレンの鮮烈さには、ちょっとイラッとする。

わたしは正直助けが欲しかったのだが、冷静に考えるまでもなく、セレンに権限を移譲する以外の方法が思いつかなかった。いか、ルナ、よく考えろ、どうすれば工房から莫大な利益を得られる？ どの方法が1番効率よく利益になって誰もが幸福になる？ そのために捨てるのはどこで、犠牲にするのはどこか。答えがあるはずもない。どこも大切なわたしたちなのだ。

ルナはためいきをついて、セレンを見る。

「あんたは、ニホに相談しなさいよ。わたしはペネスに行く。それまでに話をつけてきなさい。わたしにおんぶ抱っこは重い。横暴なのは分かっているし、私の名前はいくらでも使ってもいいし、責任は取るから、あなたはもうあなたの名前で仕事をする時期よ」

セレンは黙り込んだ。

正直この年齢には酷だ。

それでもわたしはもっと幼い頃から、何故かそれをやる羽目になった。

「わたしは、じゅうぶん、でしょうか？」

言いたいことが分かって、思わず抱きしめた。

「ど、どんだけ、買われてないと思ってるのよ・・・」

ラスペの立ち食いの屋台はルナには慣れたロケーションで、大抵はピザのような粉物を食べるのだけれども、この日はたまたま汁物の麺を食べた。大きな海苔が3枚も乗っていて、食べ方に困ったのだが、スープに浸すとうまかった。

「まいど！」

小銭が足りなくて、変な払い方になったけれども、お札を払って終わる。

なんか、蜂の巣を叩いている気がする。それはセレンを焚き付けているのもあるだ。いいのかと考えると、仕事だろとしか考えが返ってこない。

すぐ間近な未来に明らかな敵がいる。それはボルニアだったリンドの奴隷商人たちであったりするのだけれども、それはシルバが見ている世界と違う。あの馬鹿は、どちらも敵ではないとっていて、世界は丸く収まると思っている。あからさまに侵略してくる騎竜兵団を敵ではないと思うのはシルバのおかしなところだが、そもそもボルニアがシンドの奴隷売買以外の理由で滅ぼそうとするのかがわからない。

(なんか決定的な原因があるに違いない。誰に相談すればいいのだろうか？)

あらしにあこがれているシルバを見て、あれのアンカーにならなければと思っている自分がある。それは同じようにセレンに期待することだし、年長者の期待のしすぎなのかもしれない。

「機械のテストを終えて宿舎に戻ったら、特訓をするわよ！ 兄の工房に属している限りは、これは必須なの！ あらゆる工房の千の問に答えられて、初めて一員なの」

千の問というのだけだいたい大きさだけれども、数百の問をひたすら浴びせ続けられる数日間は地獄のはずだ。セレンは学がないことがコンプレックスのようなのだが、100%の正答率を出す変態はいない。

それで問を出すたびに問と正答を並べたリストを渡してやり、体系だって整理してやる。そんなながら作業をしながら、ああ、これはいいマニュアルになるなあなどとぼんやりと考えるのだが、その間にもやらなければならないことが山積みだった。

まずは機械のテスト。

ハッカビー兄弟の工房から搬出したポンプを栈橋に運び、わたしが設計した蒸気機関と合わせてみる。のろのろと進む電車の荷台に揺られながら、あいつちゃんと動くかなあと、自分の設計した機械のことを考え、セレンに質問をする。

「高性能な電動モーターを主に作っている工房は？」

「えーと、バーナードさんですよ」

「そうそう、あの工房は凝りすぎるから大変なのよ、まあ高級品作っている分にはいいのだけど、そうそう高いモーターって使いどころがなかなかないのよねえ、だから売れない。今回みたいにセットにしてやらないと、いけないのよねえ」

もうメモをとるのはセレンがやるようになっていた。

リュディアからやってきた紙にペンを走らせ、書き終わると慎重に荷台に置いた。

ルナはセレンを話し相手に自分の知識を吐き出しながら、次第に自分たちを取り巻いている状況がどうなっているのかがつかめ始めた気さえしていた。なんだ、案外わたしが整理していなかっただけなのかも。

「ルナさま～！！」

遠くから呼び声が聞こえる。あれ？ ついた？ と聞くとセレンは慎重に頷く。

幌から顔を出すと、ぴかぴかの蒸気機関が眩しいぐらいに陽光を反射していて、水面のそばに鎮座していた。隣に電車を寄せると、低速ギアを噛ませたクレーンを寄せてだいぶ年季の入った蒸気機関を作動させる。

「結構重いよ！ 慎重にね！」

ポンプの下にある木組みのパレットに鎖を通し、慣れた面々がてきぱきとポンプを新作の蒸気エンジンのそばに降ろす。すると工房の人間がポンプの接合部に蒸気エンジンの軸をジャッキで合わせ、ゆっくりゆっくりと接合していく。凹に凸を入れる。プラスドライバー、マイナスドライバーと同じ原理だ。

機械の設置が終わると、油紙を分厚く重ねて針金で補強したホースをポンプにつなぎ、川面にそれを入れる。

「やるか」

許可するのは必要で、それで石炭班が動き始める。石炭に着火するには時間がかかる。それで、せわしく動くのだけれども、こわいぐらいの火種を用意して、それを盛大に燃やしてやる。石炭と石油が違うのはここだ。石油はマッチを寄せるだけで爆発する。

石油というかガソリンエンジンの開発者はいたのだけれども、あまりにも不安定すぎて実装化を投げてる。エネルギーの高いも

のはだいたい不安定なのだ。爆発するし。壊れるとお金かかるし。

燃え始めると石炭は、火が消えない。

それでもやっぱり石炭以外の方法がないので、炊くようには言わないのだけれども、無言のうちに石炭に火を灯すように話が進む。目の前の蒸気機関に石炭がくべられ、熱源になっていくのをぼんやりと見つめる。

蒸気機関が徐々に出力を上げていき、設計通りに稼働していくのは快感だ。

ポンプは予定通りに水を吐き出し、全員の拍手が湧く。それでも、なんと行ったらいいのだろう、これはシルバの望んだものなのだろうかと考え、そこに至ってないと思ってしまう。なにかわたしの中にまだ見ぬシルバの姿がある気がして、それに足りないと感じることが、わたしには苦痛なのだ。

「まだ、これで喜ばないで」

ついそう言ってしまう。

11.

バーナードの工房にたどり着くと、少年の従事のはきはきと迎えた。

「ルナさま、お話は聞いています。シャビから戻られたとか、ですが主は懐疑的です」

頬を赤くして必死に訴える少年がかわいそうに思えて、ルナはその子に同情した。

「機械が全部揃っているから、それを確かめてほしいの、全部やってね。信じないだろうと思ったから全部持ってきたの。テストしてほしいの」

親指を立てて、蒸気機関が稼働していてぶるぶると震える竜車を指すと、やっと意味がわかったようだった。

「あー、主に伝えに行きます！」

ばたばたと少年は奥へと戻っていく。

「ここはいつも変わらないわねえ・・・、ハッカビー兄弟の工房みたいにすんなりとは行かない」

セレンは遠慮がちに言う。

「も、もしかして、ここって面倒な工房なんですか・・・？」

「あー、うーん・・・、そうかも・・・。そんなこと考えたこともなかったけれども、面倒といえば面倒かも。馬鹿と天才は紙一重と言えはいいの？ 売り方がわからなかったから放置してたけど、今回の件でどうも役立ちそうだと思ったから、お願いしたの。わかるでしょ？ 天才肌の、すごく神経質な工房なの」

セレンがメモをし始めるのを見て、いやあ、困るなあと思ってしまう。

わたしが考えていることがだだ漏れじゃないか。

ただ、セレンがわたしの仕事のだいぶの部分を肩代わりしようとしてくれているのは、心強かった。屈んで耳元で囁く。

「言っちゃ駄目よ。わたしがあなたが天才か馬鹿なのか掴みかねてるって言ったら問題でしょ？ ちょっと問題はあるけど、天才だから許す、くらいでちょうどいいの」

すぐに初老の男が駆け寄ってきて、口を開く。

「す、すみませーん。来る気はしてたのです。それで最終試験をしていたのですが、あれ？ どうしたのですか？」

バーナードがきょとんとした顔をする。

「ああ、驚かせてごめんね。ハッカビー兄弟のポンプが素晴らしかったから、ぜひ、合わせてみたいと思って、持ってきたの。テストする準備はできているんですよ？」

バーナードは竜車まで寄り、そこに備え付けたる旧式のクレーンを見上げる。

「これ、だいじょうぶなんですか・・・？ だいぶ古いですけど」

「今のところは問題は起こってないから」

ふんふんと言聞きしながら、バーナードはきざに高価な葉巻を吸い、合わせてみましょうという。

「実機は全部持ってきてるから、なにか不満があれば言って」

ルナは竜車の従事に、慣らし運転していた蒸気機関から、熱した石炭の入った鉄籠を外すように告げた。

電気で動く駆動系というのはだいたい問題だ。

内燃機関とまったく違う理屈で動いているし、蒸気機関のスペシャリストであるルナでも、電気工学に通じてるわけではないし、ほんの少数しか専門家がない分野だからだ。

それで、技師のほとんどは、でんきにふれるのがこわい。

触れると、しびれて感電死するとも聞かし、電気系のスペシャリストと話す機会も滅多にない。そういう意味ではこのバーナードは希少な技術者なのだけれども、どうも扱いが面倒で、いつも口うるさい要望を投げってくる。

中庭に竜車をよこすと、バーナードが新作のモーターと思わしきものを運んできた。

対になっている2つのモーターで、その間を長い電線が繋いでいる。

「これって感電しないですよ？」

「いちおうゴムの被膜で覆ってますし、設置するのめだいが高所にします。動力はチェーンで伝えますので、設置には結構自由度がありますよ」

設置場所は自由と言っているのは、水をかぶる心配のない場所に設置できることを言っている。

そうか、歯車じゃなくてチェーンでやればいいのかと、ルナは感心し、シルバはこういうことを見越してモーターを使おうと発

想したのかと思うと、その差が圧倒的すぎて少しこわい。

サウスと対話できる、変態的な天才と自分を比べるのはこわい。

「あれがルナさまの新型ですか？ ずいぶん馬力が出そうですねえ、耐えられるかな。こっちは旧式でテストするしかなかったので」

バーナードは自信なさげに言うが、ルナはこの男の変態的な神経質さには自信があった。つまり過剰性能で設計していることはほぼ間違いないのだ。それで必要以上に割高になりがちなのが玉に瑕なのだが。

「じゃあ、ちょっと見てみる？ いちおうここまで慣らし運転してたから、火種はあるの。すぐにでも最高出力がだせるから」
石炭の入った鉄籠を指差すと、バーナードは頷く。

「じゃあ、おねがい！ もう一回、蒸気機関を稼働させて！」

従事たちが籠をルナの蒸気機関に格納すると、派手な蒸気を上げ始めた。ぷしゅぷしゅという力強い音が響き始める。

「こりゃあ・・・、なんですこれ？ 8本シリンダーとかですか？」

「12本」

「そりゃあ、オーバークオリティなきが・・・」

おまえに言われたくない、とは流石に思ったのだが、それでも恐れを感じていない表情を見て、ああ、たぶんこのへんは想定内なんだろうなあと思う。鉄籠を外させ、注水をして、蒸気機関を文字通りクールダウンさせていく。それを遠巻きに見ていた少年たちがバーナードのところへよっていき、細かな指示に頷きながら、重いモーターを設置場所に運んでいく。

「それはそうと、あの鋼材は何なのですか？ ずいぶん積んでますが」

目ざとく竜車に積まれた鋼材を見つけたのはさすがだった。

「ごめん、忘れてた！ あれ持ってきたのも用事の一つなのよ。ダマスカス鋼。ペネスのシルバの工房でおもに使うつもりなんだけど、この工房でも試してみて。シャビから運んだの。うちに工房ではすごい評判だったわよ。テストした数値を聞く？」

さらっと数値をいうと、バーナードは青ざめた。

「なんですそれ」

「長期契約するつもりだから、発注したければわたしに言って。船便で運ぶつもりだから1月ぐらいは到着まで時間がかかるけど、ハッカビー兄弟は40ミリと25ミリのシャフトがほしいと言ったわ」

「うーん、40ミリってちゃんと理解してってるんですかねえ、その数字じゃあ太すぎでしょう」

「ああ、半信半疑なのよ」

こういう突っかかるところが面倒なのだ。

それでもたぶん、数字から40ミリは意味が無いと思っているところが、天才なのか馬鹿なのかかわからないところで、ルナはいちおう干渉しないことにしている。

「発注は好きな注文をして」

バーナードは考えた。

「では25ミリから、1ミリ刻みで15ミリまで」

わかっていたけど、めんどい。

バーナードのモーターが設置されていくと、いよいよこのシステムの中核部分が揃い始める。それはわくわくする光景で、ほんとうに発電機側のモーターと電動機側のモーターが電力をやり取りできるのかという、誰も試したことない再現に立ち会うことになる。

サウスの理論が正しければ、何の問題もないはずだ。

それでも、実際にそれが再現できる光景を見たものはないのだ。

バーナードの言によれば、旧式の蒸気機関で試しているようなのだけれども、それでも実際に商品として売るレベルで稼働した実績はない。お金にならないならばそれは存在していないものと扱われるのが、シドだ。

心細くて、シルバに祈る。

(失敗しちゃったかなあ。12本シリンダーは無謀すぎた？ だって、パワーは必要でしょう？ でもさ、バーナードはちゃんとやってくれるよ！)

もうわからなくなって、機材を設置している所を手伝うんだけど、凝り性のバーナードの工房の仕事は理不尽なほど整然としていて、ミスはたぶん起こらないとわかる。蒸気機関と発電側のモーターをつなぐチェーンが装着されると、もうやる事がなくなる。それでもバーナードは執拗で、チェックリストをもたせた少年たちに最終チェックをさせた。

OKで一す、の音があちこちから聞こえる。

最後の一声が聞こえたのを確認して、バーナードはわたしを向いた。

「耐えられますかねえ。どれくらい試してみます？」

わたしの蒸気機関には問題がないことは前提の発言だ。

「そうね、夕暮れまで、それで充分でしょ。わたしたち、まだ朝ごはん食べてないの、突貫でここまで来たから。パンとお茶だけの質素なものいいから、ごちそうしてくれない？」

たぶん、こう言うと、この工房は恐ろしいほどに凝るだろうかと、思っていたのだ。

「朝食の研究はあんまりしていないので、ご期待には添えませんでしょけど」

ああ、こわいことを言っている。

お招きされた卓で出されたのは、バターの効いた焼いたバゲットの上に乗せられた、塩麹まみれのイカゲソで、ほどよく唐辛子とガーリックが混ぜられたものだった。

「なんですかこれ！ ラスペでお店出してくださいよ！」

セレンが感激するのに、わたしもこれはファストフードとして優秀だなあと、思ってしまう。実際的に言うと、焼き立てパンじゃないとこれはできないので、屋台ではたぶん無理なのだが、セレンの感激はよくわかった。

バーナードは調子に乗って、お昼はどうしますか？ と聞く。

「パスタ！」

これはセレンだ。

うかがうように視線を向けられるので、もうちょっとひねろうかと思う。

「ミートソースの一番うまいやつを」

「時間かかりますよ、いいですか？」

まだ朝だろとは思ったけれども、煮込む始めると時間がかかるのかもしれない。

ちらっと見ると、大量のトマトソースに香草を混ぜ始めて、配合はわからない合い挽き肉を混ぜて、オリーブオイルでいためていく。しばらく焼き目と火を通すと、だいたい美味しいミートソースになる。

トマトがだいたい美味ければミートソースは美味しい。

もちろん、オイルは大切だけれども。

「ルナさまって、シルバさまの仕事をしているときはいつも嬉しそうですよ」

耐久試験をしてる間はだいたい暇だ。

それでセレンとのんびりとお茶を飲んでいるのだけど、セレンはいつもどおりキツくて、挑んでくる感じが心地よくはある。

「なにか問題があるの？」

「いえ、なんでこんな仕事続けられるのかって、疑問に思ってしまった。蒸気機関の設計しているときのルナさまの集中を見せようと、しかたなくやっていることがまるわかりなんです。でもシルバさまの仕事は別。楽しそうなんです」

しばらく考えるが、自分のことなんて観察していない。

「なにを言っているかわからない」

「自覚がないんですね。ルナさまは、この仕事を「あなたが作った」と理解していないのです。ルナさまとシルバさまの会話は聞いていました。ルナさまはやるべきよ！ と言ったのですよ。お金なんてわたしが集めるから、心配しないでって、格好良かった。ルナさまのようになりたい」

どぎまぎするというか、だいたい褒められるのは照れる。

「し、シルバの名前で取引すると、だいたい成約するのよ。わたしはシルバの名前を利用しているだけ。この前の蟹伯爵との出資交渉でも、シルバが関わるのか聞かれたし」

「蟹伯爵？」

「ああ、有力な出資者よ。蟹が好きだから蟹伯爵。正直、外観でたぶらかしているの。でもわかるでしょ？ わたしが好きなのは外観とか気しない人なの。セレンはたぶん、子供でなくなれば、大人になれば、ぐっと魅力的になる。でもそれで仕事してほしいとは思わない。あなたは、わたしからみればもっと魅力的だわ」

セレンはぐっと言葉を謹んだ。

「殺し文句がお上手ですね、ルナさまは・・・」

「本気よ。シルバと仕事していて楽しそうに見えるのは、どんな無茶な提案でもシルバの名前を出すと、全部通るからでしょうね。わたしはただ話に行っているだけ。そこにシルバがあると全部通るの。わたしは何なの？ と考えてしまうわ。いったい、数千キロを飛んできたわたしはなんなの？ って。シャビで実感したでしょ？」

「それは違います！ ルナさまはルナさまです！ もっとご自分を大切にしてください！ あなたさまが、シルバさまを作ってるんです！ あなたさまがシルバさまのすべてなのです！ なんてわからないのですか！」

衝撃というものは、直撃を食らうとよくわからない。

「わたしは」

「言い訳しないでください！」

考える時間はあった。たぶん3分ぐらい。その中で、シルバとの関係を整理できたかと言われると厳しいわけで、目の前の閻魔大王が憎たらしくは思えた。

「好きなんですか？ 嫌いなんですか？」

究極の問題に答える。

「すぎです・・・」

セレンは清々しく笑った。

「予定通りです」

12.

日が暮れて、夜気が冷えてくるとさすがに頃合いになる。

松明を炊いて綿密に数値を取っている少年たちの間にたたずむバーナードに、無言で視線を送った。

「耐えたと思っていいのでしょうか？」

「充分。はじめから分かって分かっていたけど。でも軽さ。もっと軽くして。ダマスカス鋼は使えると思うからそう言ってるの。あなたはこの鉄の実力をハッカビー兄弟よりは理解していると思っているでしょ？ だったら証明して」

わたしの仕事はだいたい現場の尻を叩くことだ。

脅しはしないけれども、顧客が望んでいるのであるであろうことを確実に伝える。

それをちゃんと達成してきたら、それは命をかけて売る。

それで利益が入ってくると、だいたい信用される。

殺伐としているけれども、それがわたしのサイクルだ。これが商売だよ、お兄さん、と思うのは皮肉なのだけれども、核にシルバがないと回らないサイクルではある。シルバの信用の力はすごくて、シといえただいたいうまく回る。

このバーナードだって、シルバのシステムに入ってしまったら、たぶん資金になる。

「ずいぶん寒くなってきましたね。明日の朝にはペネスに立つのですが、」

「ああ、すみません。泊まるところが薪の前とはいきませんね。部屋は用意してあります。それよりも夕食ですよ。実は用意してあるんです」

キャンプファイアのような篝火の前にクッションの効いたマットを用意され、そこに座る。セレンを側に呼んで、細かなペネス行きの打ち合わせをしながら、お茶が振るまわれて、それをおいしく飲む。

前菜は、わらびの塩漬けで、それからオイリーな魚の燻製が出た。

そうするとだいたいくるのは、サーモンだ。

臭いほどに新鮮なサーモンが刺し身ででて、暴力的なほどにわさびとしょうがで食えと主張する。ひとくち口にするサーモンは美味しいけど、どう食べたら一番美味しいかが分かっていない味付けだ。

たぶん、アボガドとわさびを合わせると凶悪なのだけれども、それに合わせるパンの塩分が気になってしまう。醤油はどの醤油がいいのだろうとか、魚醤がいいのだろうとか、生醤油がいいのだろうとか、つい考えてしまう。

「ルナさま、明日なのですが」

うん、分かっている。

「バーナード、どれだけダマスカス鋼を置いていけばいい？ シルバの方でも使うから必要最低限にしてほしいのだけど？ もし足りなかったら発注して、届くのは1月後だけど」

「もっと薄いほうがいいのですが、5ミリ板を20枚ほど」

「そんなのでいいの？」

「あー、モーターは細かい部品の集合体なのです。それを加工するのに1月はかかります。つまり作業している間に次の荷が届くのです。それにモーターの心臓部はコイルです。そこが一番重いのですが、電気抵抗の関係で鉄を使うわけには行きません。銅線なのです。それに強度の必要などころではありませんし。要らないと言っているわけではありませんよ？ ペネスからお戻りになる頃にはだいたい試しし尽くしていますので、そのときに発注します。ですから、かならず寄ってください」

ルナは、うんと頷く。

「安心したわ。わたしも自分の工房を見なくちゃ、こんなの久しぶりなの、わくわくしているのよ？ あのクレーンの旧型がわたしの蒸気機関だなんて思われたくないじゃない？ ぼろいじゃない？」

苦笑する初老の男がこれほどに楽しそうにするのを見たのは初めてだった。

「ルナさまがこんなに機械狂いで、仲間だとは思いませんでしたよ」

「あら、わたしはこれでも蒸気機関の技師なのよ。機械にさわれない雑用なんてしたいだなんてこれぼっちも思ったことはないの。でも、わたしが好きな機械いじりを犠牲にしないと、兄の工房は回らないでしょ、仕方ないの」

気おくれしているセレンに気付いて、夢中になっている心を取り繕う。

「ですがお料理は、落第点があります」

「え？ はい？」

「醤油にお詳しくないですよ。醤油は新鮮なほど美味しいのですが、これは数年経っている醤油です。調味料は厨房にずっとお

いておくのではなく、その日使う分を市場で買ってくるといいですよ？ できれば一番美味しいところを選んで。お店ではこれは出せません。あ、そう・・・、いやですよ、こんな知識ばかりがつくんです、接待ばかりしてると」

おもわず言ってしまうと、あわてて誤魔化すが、こういうのが、だめなのだ。率直に言い過ぎる。

言ってしまったあとに、さりげなく打ちひしがれるセレンを見た。

あなたに言ってるんじゃないのよ。

これを引き継げと言っているわけではない。

こんな汚れ仕事を引き継いで欲しいとは思っていない。

ペネスに経つ日は、だれも見送りしなかった。

バーナードはそんな人だと思っていたし、逆に見送りされたら何か変なものでも食べたのではないか、なんか悪いこと言っただろうか、と考えてしまう。

ペネスが特別なのは、シルバがいるからで、兄貴の工房からすると、唯一の利益を上げられる工房があるからだ。

ペネスに竜狩り都市の名を冠されているのは、だいたいシルバのせいで、かれは特別な狩りをし、それを仲間に教えている。もともと伝統的な狩りではあったのだけれども、シルバが完成形といえる領域に磨き上げ、幾つもの狩猟団が繁栄するようになった。

それは誰も見たことのない狩りの仕方、ペネスに根付いてしまった鉄砲文化と、シルバが製造する銃で成立している。これに誰も注目していないのがふしぎなほどで、大量に上がる利益は兄の工房を支えているのだが、そこに着目する人はあまりいない。

シルバの射撃の腕が支えていると思われているからだ。

その通りであって、その通りではないのだが、もう少し理解しようとしてもいいではないか。

あのリラという猛禽のような取材者でもドライゼ銃に気付かなかった。たぶん、シルバのような射撃の天才であれば、百発百中のだろうという誤った理解をしているのだ。

彼の狩りは特別で、呼子と呼ばれる追い込み衆が竜を特定の場所に追い込み、獣脚竜に乗ったシルバが、その躍動する竜の背から、襲いかかる竜の急所に命中させて、失神させる、組織的な猟なのだ。

これはなんど見ても手品にしか見えないのだが、何百という失神した竜が、貴族に売られている記録が残っている。

その中心に、メイファという天才的な工房主がいる。

シルバがそれを見つけてきたときは、この幼馴染の圧倒的な才能に、打ちのめされた。

奴隷だったという。

当たり前のようにシルバに恩義を感じて、見た感じは恋愛感情も持っている気がするの、面倒くさいのだけれども、あの女の言い分なんて聞く必要はないんですよ、と言われてしまう。

頑張ってお金を回そうとしているのに。

「は一、でも、ほんとにこれがシルバの役に立つのかしらね？ だって、あいつ外さないじゃない。後詰めとか意味ないでしょ。だって一発しか打たないんだから」

セレンはまたかと思い、ルナを諷めようとする。

「たしかにシルバさまのような射手は稀有です。ですが異常者を前提に工房を考えるのは間違っていますし、商売相手の売り先は下手くそですよ？」

バツが悪くなるというよりは、まあそうだと素直に思った。

「そ、そりゃ、そうよね。一番気にしなければならないのは、だれがなにを望んで、何がほしいか。そんなのわかってるし、」
隊列となった竜車を先導しながら、言葉少ないセレンを、背丈の関係で見下ろす。

この少女はだいぶ無理をしていた。

わたしは譲るべきだし、この子が背伸びをしていることを、自分の責任だと思うべきだと思った。というかセレンや各工房にどれだけ低い賃料で働かせているんだよ、と思うし、どれだけわたし無報酬で働いているんだよ～、と思う。

ペネスまでやってくると、どうしてもどれだけ稼げるかと思ってしまう。

それは良くないことだと思う以前に、どれだけ搾取してきたのだろうと思う都市だし、この地に足を踏み入れると、罪の意識でアウェイだと思ってしまう。

ラスペは盛大にお金を配っているホーム。ペネスはお金をむしり取っているアウェイ。

連れてきた竜車の列にも、金稼ぎなさいよと言っている気がするし、そもそもわたしはシルバに金を稼げという以外に興味が無い気がないような気がして心細くなる。

「これはなんですか？ 書類の申請がないのですが？ 鋼板ですか？」

入り口で捕まって、うっかりしていたことに気付く。

「ダマスカス鋼です！ シルバさまの工房から申請が出てませんでしたか！？」

あー、いえ、えーと、書類は来てませんねえ。

「へー、シルバさんが、ダマスカス鋼ですか！ それはニュースだ」

何か面倒になりそうなので、セレンをなだめる。

「シャビからの荷受け証はあるから、これで代わりにならないかしら？ ダマスカス鋼をシルバの工房で使っていることが証明できればいいんでしょう？」

ルナの顔を見て、税関の役人の顔が固まった。

こういうのは楽でいい。

「あ、はい、ルナさんですよ！ 光栄であります！」

税関を通過して、うんざりしたルナはセレンに追い打ちをかけられる。

「ルナさまって、顔パスなんですよ！」

「いえ、あれ、不快なの……。特権階級みたいに見えるでしょ？」

ああ、まあ、実際に特権階級の人間なんだけど。

シルバの工房にダマスカス鋼を運ぶと、数字を測るテストが行われて、ルナが数字を言って、だいたいそのとおりだとわかると、テストの輪は消えた。

メイファを伴ってシルバが目の前に座り、興奮した様子で話し始める。

「この鉄はすごいね。どうしてわざわざシャビから仕入れてきたの？」

「ああ、うん、渡した文献にダマスカス鋼って書いてあったでしょ、だからそっちのほうが性能が良くなると思ったから」

「ルナってそういうところ律儀だよ、まあ助かるけど」

きょんととして言われると、それぐらいしか取り柄がないと言われていたような気さえしてしまうのだが、シルバは明るく他意がないことは明らか。

「まだこれはサンプルで、お金は払ってきたけど、正式に発注したわけではないの。10ミリ板と5ミリ板を持ってきたから試してみて。この工房で使ってるのは10ミリ板でしょ？ でもシャビでは10ミリ板なんてめったに使わないっていうの」

シルバはしばらく考えたが、まあ、爆破してみないとなあ、と不穏なことをいう。

「爆破？」

「そりゃそうだよ、鉄砲なんだから。発砲時の熱と圧に耐えられなくちゃ。しかもドライゼ銃は前込め銃よりも頻繁に連射するんだから、熱はとんでもないことになる」

ああ、なるほどと理解するが、それ以上突っ込むのは専門でないだけあって野暮だ。

「でもこれで、劇的に軽くなるかもなあ。5ミリ板で10ミリ板並の耐久性が出たらとんでもないことになるよ！」

まあわたしはこうやって、きわめて精密に有頂天になっているシルバを見ているのが好きなのだ。

「それよりも、例の鉾山のポンプの話、蒸気機関とモーターとポンプを持ってきたから、あとでテストしましょう。それに最初の顧客も見つけてきた」

なんかそう言ってしまうと自分がシルバに忠実な猟犬のような気がしてしまう。

でも多分セレンの言うように、わたしはシルバの名前を使って勝手に儲かる商売を作っているだけなのだ。それがシルバの望んでいた事の実現につながるなら、それでいいじゃないか。

13.

シルバたちが作り始めたのは、ドライゼ銃のボルトアクション部分で、その両端が閉じられたものだ。銃の装填部分だけがあって、銃身がない。装填するのは本来は打ち出す弾と火薬と起爆装置から弾を除いたもので、一弾ごとに油紙で包んで携帯しやすくしている。シルバはベルトに革のポーチを付けたものをどこかで作ってきてもらったのか、そこに数十発の弾を入れる。

「じゃあ、やろうか、まず10ミリから」

おもむろに言って、出来上がった試作機を、必要はないのだけれども構える。

たぶん、シルバにしてみればドライゼ銃の使い勝手のテストのつもりなのだ。

「お金がないから、それぞれ20発ずつ」

誰にも見えない標的に照準を合わせて、放つ。それから射線の先を凝視して、舌打ちをする。外したようだ。装填口を開き、革のポーチから新しい弾を掴んで装填して、また放つ。

それはうつくしい所作を見ているようで、流れるような動作にルナはシルバがなぜ射撃の天才なのかが分かる気がした。10分も経っていないはずなのだけれども、その狂気の時間に出資をしたくなかった。

「こんなもんかな。銃身がないと結構ぶれるね。銃口を重たくした方がいいかな？」

シルバは装填口に手袋越しに触れ、それから手袋を脱いで触る。

「あち！ まあ、いつもこんな感じだし、やっぱりこの銃は熱が弱点だなあ」

にこにこ笑っている。それから、手袋をして装填口付近の様子を綿密に見る。先込め式の場合は爆発させた火薬のすずを取るのが普通なのだ。それですすがどれだけついているかを見ているようで、うんうんと頷いた。

「20発までは大丈夫。限界がどこにあるかはわからないけど、冷却も必要だし複数持つか、整備をしてくれる人が必要になるのかな？」

ルナにはそれが異次元の発想すぎて、なにを言っているのかわからなかった。

なにを想定しているのかがまったくわからない。

まるでサウス人と話しているよう。

「じゃあ、5ミリ行こうか」

テストを終えたシルバは始終満足げで、メイファがくれたおいしい紅茶を飲みながら、ビスケットを食べる。

テスト結果を聞くまでもなく、シルバが5ミリのダマスカス鋼を気に入っていることは明らかだった。頭のなかではシャビの工房に送る発注書に添える挨拶文の草案が渦巻いていたのだけど、卓を汚さないように丁寧にビスケットを食べるセレンの姿が目に入ってしまって、あれ、セレンって孤児院あたりから来たんだっけ？ と思ってしまう。

それはシルバの姿と重なってしまうからで、そんなに遠慮する必要はないと、どうしても思ってしまうのは、ルナが特権階級の人間だから。

いや違う、セレンは読み書きができるし、それは修道院で習ったと言っていた。

そうなる、やはり身寄りがなくて引き取られたのだ。セレンの高潔さはたぶん修道院の空気を引きずっているのだろうし、厳格な規律の中で植え付けられたものなのだろう。

そんなに丁寧にビスケットを食べなくてもいいのに。

「セレン、もっとぎっくばらんに食べていいのよ。難しいかもしれないけど」

「あ、あの、わたし堅苦しかったですか？」

あわてるセレンの頬に指を触れる。

「いえ、でもあなたが好きよ。それはあなたがあなたである以上変わらない、信じて」

セレンは当然なのだが赤面する。

それからもごもごと何かを言おうとして、やっぱり言えずに黙る。

「セレンはよくやってくれているわ。正直わたしがいなくても大丈夫なのではと思うぐらい。でも汚れ仕事はわたしがやる。それはわたしの永遠の職務だから。でも、それはわたしがやるから、もうちょっと汚れていないところをやってくれないかしら？ けっこう手一杯なの」

セレンは、すこしずつ泣き始めた。

「ルナ、さまは、ずるいです……。だって、なんで、断れる、んですか。お金の計算ぐらいさせてください……。わたし、算

術は習ってるんです。もっと頼ってください……。それぐらいできるんです……」

目の前で起こっている光景が信じられなくて、その心細い肩を抱いた。

「わたしはあなたに汚い仕事をしてほしくないだけ、そんな犠牲はわたしだけで充分。わたしにはそれをしなければならぬ十分な理由があるの。だって、兄の妹なんだもの。でも、セレンがそれを手伝う必要は一切ない」

セレンは悲しい表情をした。

しばらく考えて、

「それはわたしが相応しくない、下賤の身だからですか？ ルナさまは高貴なご身分ですから、わたしなんかには任せられないと……」

ちがうちがう！

そんなふうには思っていたのかとショックを受け、それをどうしたらいいのかわからなかった。

こんな仕事、やっちゃあいけないのよ。

投げ出していいと言われれば、正直投げ出したい。それをか細いセレンに丸投げするのは虐待のように感じるし、たぶんセレンはわたしに任せきりなのを酷い仕打ちをしているように感じているのだ。

「あの、ルナ？」

ぼかんとしたシルバを見て、現実には引き戻された。

「なんだかわからないけど、ぼくたちも頼って欲しいかな。この工房は自慢じゃないけれど、みんな優秀だ。メイファのすごさは分かっていると思うけど、手伝えることなんていくらでもあるよ。ルナが抱え込むことではないよ」

我に返って工房を見ると、好意的な眼差しが自分に向いているのに気づいた。

照れ隠しにビスケットを齧る。

「じゃあ……。テストをするから……。わたしの蒸気機関、バーナードのモーター、ハッカビー兄弟のポンプ。それを合わせてみましょう……。シルバ、あなたの望みどおりのものになっているかはわからないけれど」

シルバは太陽のように笑った。

「最高だね！」

なんでこんなに眩しいのだろう。

この太陽に照らされると、ぼかぼかと陽だまりにいる気になる。

14.

「あれ？ ルナさんじゃないですか、なんでこんなところに？」

見慣れたとはまだ言い難い猫のような猛禽顔の女の子が、しらじらしくへらへらとして立っていた。

「ひどいですよ～、工房に行ったらどなたもいなくて、近所に聞いたら谷底に向かったと言うじゃないですか。それで、たぶん降りるならここからだろうなと思って先回りしていたんです。しかしなんですかそれは？ ずいぶんたくさんの機械があるじゃないですか。これからなにが始まるんです？」

ルナはシルバをみて戸惑うが、

「リラさんですよ？ 週報の。なぜうちの工房に？」

シルバが聞くのに、リラは爆竹のように話す。

「上がしつこく言うんですよ。もっと取材してこいって。わたしの取材が片手落ちだって言うんです、なんで竜狩りの方法を聞いてこなかったんだとか、銃の最新型はどうなっているんだとか、大規模なスポンサーが興味を持っているんだとか、全社的にこれは追わなければならない案件だとか、たまったもんじゃないですよ！ ちゃんと取材できたと判断できたらボーナスは弾むとかまて言われているんですよ！」

リラは相変わらず、要らないことまで話すけれども、この無邪気であけすけのない性格にはどうしても心を許してしまう。リラは上と言っているが、クリフォード社は各国の支局を除けば、本体と言えるラスペ・ペネスを担当するのはクリフォードとリラしかないはずだ。となるとそう言っているのは自然とクリフォードになる。

「取材は受けるから、落ち着いて。これからテストするのはぜひシド全土、いえ、他国にも広めてほしいことだから」

リラは複雑な機械群を眺めて眉をしかめるが、

「これは何の役に立つのです？」

「これから実演するから、みてて！ これで世界から奴隷を一掃するの！」

竜車を動員して、谷底まで下り道を重機械を運ぶのは予想通りに難儀で、ペネスの吊橋から谷底まで何百メートルあるんだと大げさに思ったほどで、実質的には曲がりくねった数キロの数十メートルの高さだったかもしれない。

そうやって河面まで降りると、ごつごつした河石の上に無骨な機械を設置していく。

発電機のモーターは遥かに崖上、コンパクトなモーターとポンプを設置して、油紙を針金で補強したホースを河面に浸す。

上空を見上げると、果てしないホースが伸びている。

ちらりと見ると、シルバの表情が輝いていて、声をかけていいか迷った。

「ゴーサインは出してね。これはあんたが考えたんだから」

ためらうことはなかった。

「やろうよ！ いますぐ、今すぐさ！ なんでやらないの?!」

なんで失敗するとは思わないのだろうか。そうになったら、大失態なのに。シルバは未来に対して太陽のように明るい。片手を上げると、わたしの蒸気機関が動き始めた。こうなると止められない。暴力的な機関が動き続け、この揚水システムが失敗であるかそうでないか以外の結論は出なくなる。

シルバが確信していた蒸気機関は動いて、それはわたしが信頼されていたことになるんだけど、シルバが信じてくれたから動くというのは、まるで宗教のようで気持ち悪い。機械は造ったとおりにしか動かない。何百ものパーツが組み合わされたシステムを個々にはテストしているけれど、すべて組み合わせてテストするのはこれが初めてなのだ。

水を数十メートル上に汲み上げる負荷に、蒸気機関の部品が耐えられるのか、モーター・ポンプもこんな負荷で作動させるのは初めてなのだ。

ポンプに近い給水側のホースが短くて、遥かに崖上に伸びるホースが長いのは、お粗末なホースが圧力に弱いからだ。吸い込み側のホースは基本的にホースの径が狭まる力が働き、揚水側のホースには外側に広がる力が働く。径が狭まると流れる水の量が減る。なので吸い込み側の径を保つためには、ホースを短くしてできるだけ補強する必要がある。

こういう話が通じるシルバの工房は楽しくて、なんで誰もが当たり前のように、それを理解しているのだろう、たぶんメイファが、こまごまと言いつつ含んでいるのだと思う。

ただそれが、実質的に全権限を握っているわたしに対する抵抗だと考えると複雑になる。お金だけじゃない、わたしがしてることなんて。なんで、お金を差配すると、仲間に入れてもらえないのだろう。

「ルナ！ ポンプの様子はどう！？ ポンプは動いてる！？」

明るい声にあわてた。

理論上は光速で電力は伝わるので、聞くまでもないのだが、作動しているポンプを確認して崖上に両腕で丸印をおくる、どうでもいいけど、これも光の速度だ。声よりは速い。

ぶるぶると水を吸い上げるポンプを見ながら、これは役に立つのだろうかと考えるのは贅沢な時間だろうか。たぶんシルバはいつまでも見ていて、組み上げられた水にずっと興奮している。

「そっちにいったでしょ！ これはだめなの？！ いいの？！」

大声で音速で返すと、光速で丸をくれた。

「これはどこに売るんですか？」

リラが崖上より崖下を選んだのはさすがの猛禽類だった。

「鉱山、もう最初の売先、ああ、お試し価格だから、売ってはいないかな。そこでテストしてもらうことはもう話がついているけど」

「ああ、テスト協力費と、製品価格は相殺なんですね？」

うるさい。

「鉱山は頻繁に地下水を掘り当ててしまっただけで出水するでしょ？ それをこれまでは奴隷を大量に使って、命の危険にさらして掻き出してきたの。でも、シルバはそれが許せなかったの。だって死ぬじゃない？ そんなことさせたら。だけど、機械にそれをやらせれば誰も死なない。計算してみると、奴隷を継続的に買うよりも、機械を買ってそれにやらせたほうが安い。だったら、機械を買うほうがいい。だから売りたい」

リラは考えていたが、しつこく考える。

「それって、奴隷業者に喧嘩売ってますよね？」

「売ってる。それがシルバの意思。機械を使って、奴隷をこのシドからなくするのがシルバの意思。わたしはそれを最大限に尊重する。奴隷は悪でしかない。書いてもいいわよ、奴隷を買うより遥かに機械を買った方が安いです」

15.

朝に目覚めると、いつもどおりぎりぎりの時間だった。

みるとシルバの工房は早起きで、予定されていた納品作業のすべてを終えていた。

「あーあーあー、ごめん、寝過ごした、かも」

メイファは気付くが、嫌みは言わない。

「起きるのを待っていたんだよ、ルナ」

嫌みを言ったのは、シルバだった。

「うるさい。お茶は沸いているの？ 朝はお茶を飲まないで目が覚めないの」

もちろんこれは言うてはいけない言葉だ。

それでもシルバは鉄瓶を火に焚べ、そこに茶葉を散らす。

だいが、自分がいけないことをしていることに気がつき始めるのだが、どうすればわたしの恥ずかしさを消せるのだろう。

お湯がわき始めるとだいたいそれが朝食の合図で、崖上から、崖下から、ぞろぞろと工房の面々が集まり始める。パンが配られ、それを浸けるためのスープが配られる。今日はエンドウのスープ。クリームが溶かされていて、甘い。そう言えばもうそんな季節かと思うのだが、たしかに暑いからそうかも。

季節を忘れている。

シルバの工房に来るたびに、それを思い出される。

自分が忙しすぎて人らしくしていないと気付かされるのが、シルバの工房なのだ。

「これ、おいしいじゃない？ そらまめでしょ？」

「うん、メイファが作ってくれたんだ。メイファ、いつも美味しいね」

それで頬を赤らめるメイファを見るのは恒例行事なのだが、これに対抗しようとは思わないのもわたしなのかもしれない。別の貢献の仕方があると思っているし、資金調達で負ける気はしない。

一晩中テストした評価は良好で、それが心を暖かくしていた。

目立った問題はない。

唯一、蒸気機関のノイズが気になったくらいで、それはわたしの領域なので、最終調整をすればいい。なんだろうなあとは思うのだけれども、たぶんどこかで強度不足が出ているのだ。間に合うのかと言われれば、間に合う。グリスを塗れば解決するのか、素材を変えればいいのかわからないけど、些細な問題。

「ルナ、いいのこれ？ なんか音うるさくない？」

シルバが不思議そうに聞く。

そう思うのはあんたが世界最高峰の蒸気機関しか体験したことがないからだよ。

ルナは落ち着いて、グリスを指に塗って、

「この油が燃えないってほんとだと思う？」

ああ、ずるい。もちろん、シルバが言うことは決まっていた。

「あ、えーと、試そうよ。燃えたら考えよう」

もちろん燃えるはずがないのだけれども、そんなに危険なものが工場ラインに入っているわけがない。サウスがそんな物質を放置しているとは思えないし、数千年も先行している文明なのだ。いつでも、サウスの最新技術を導入するときには、これはつきまとう。そもそも理解して使っているわけではないし、借り物でしかないし、宣託を告げるシルバという天才は、わたしには理解不能なのだ。

シルバは調合したグリスを塗り、なんの問題もないというように、ゴーサインを出そうとした。

「まってよ、これが失敗したら、50万グロアが飛ぶの。せめてわたしに判断させて。これはわたしの蒸気機関だし」

正直恐ろしい。

蒸気機関の爆発的なエネルギーがわからないと任せられないし、それが暴走する可能性を想定できるのは、その装置の危険性を理解している人間だけだ。予知できない摩擦熱が生まれる可能性がある。

「少なくとも人知は超えているの。悔しいけどわたしが知り尽くせないほど。だって、これまで莫大なお金を払ってきた奴隷が救えるとかおかしいでしょ、あなたが発想したことだけど。世界を変えてしまうの。世界がぜんぜん違うものになってしまうの。あ

あなたが、基準点になって世界が違う時代に行くの。それはいいの?!」

恐ろしく正確に伝えたつもりだったけど、シルバは、しばらくゆっくり考えた。

「そんな光栄な事はないよ」

シルバが世界を変え始めたのは、鉱山の奴隷を開放する運動だし、そのための機械を高価で売る活動だった。

そして商売上支えていたのは、奴隷は高くて経費がかかるので、継続費用の掛からない機械のほうが安いというルナのロジックだった。だからはっきり言ってとても売れたし、それでシルバの工房は羽振りがよくなった。

しかしこれは、奴隷業者を完全に敵に回したし、非法な妨害工作が来てもおかしくなかった。それを救ったのは、大スポンサーを抱えていると明言しているクリフォード社で、シド全土のに大影響を与える週報で、ひたすらにシルバの思想を語り続けた。

他のだれが、鉱山の出水に対して、機械を使えば奴隷が死ななくなるし、お金も儲かると言ってくれるのだろう。誰もが警告する通りにこれはこわいし、莫大な資金を投じての反撃があった時にこれを救ってくれるセーフハウスはない。

側にいるのは脳天気なりラだし、直接工房を擁護してくれるスポンサーはいなかった。

「だってさあ、クリフォード社は支えるっていつてるんでしょ？ だったら乗るべきじゃない？ チャンスなんだし」

これはわたしの未熟な主張。シルバは賢明にも結論を先送りにしていて、実際に利益が出始めるのを待っていた。これはシルバのバランス感覚がすさまじかったという話になるのだけど、これを慎重すぎると言うのは失礼だろう。

シルバがたぶん考えていたのは、これはたぶん壁が厚いということだけなのだ。

この感覚がシルバの本質なんだけれども、いつも口うるさい沈黙をするのがシルバ。たとえば非公式だとしても、常に沈黙を挟んでくる。

「なんかいいなさいよ」

納品先に機械を運ぶ竜車を先導しながら、話しかけてもシルバは黙っている。

「話してくれないとなに考えてるのかわからないんだけど」

「うん、時間を使いたいんだ。ルナはなにかを言うときにすぐに大陸の端まで飛んでいってしまうから。シャビまで行ったんだろ？ やりすぎだよ」

ルナはむくれて反論する。

「でも、ダマスカス鋼の調達ルートを作ってきたじゃない！」

「それは感謝しているよ、でも、働きすぎだよ。困ったな、この工房にはすごいメンバーしかいないんだ。あまりにもすごすぎて、おいて行かれそうになる」

シルバはいつもこんな感じで、常にバックヤードにたたずむ老人のよう。まるでその遅さで全工房の時刻調整をしているようで、掴み難い。気付くと工房の標準時になっている、そんな感じ。言葉をかわずと時間が溶けて、シルバの時間に染まっていく。

「あの、ルナさん、シャビ行きの話聞かせてもらえませんかねえ？ わたし、ボーナスで釣られているので、社主の思うツボなんですけど、出すと言うんだから貰うのが筋ですよ！」

あー、面倒くさいのが来た。

「どうせ、シルバの評伝の隅っこにちょろっと乗るぐらいでしょ？」

「ええ、まあ、そういうことは言わない約束になっているので」

へらへらとリラは笑うが、このときの取材内容は最終的にはルナの評伝のほとんど全てになるのである。神秘的に包まれた蒸気の女王の評伝として。

ルナが野バラの諸侯のひとりになるのは、この取材のおかげだった。

蟹伯爵の鉱山に向かう山道は、ひたすらに喋っている道中だった。

しつこいリラに噛みつかれる毎日で、取材者というのは噛み付くことが仕事なのだと思ったほどだ。あ、といえば噛みつかれ、い、といえば噛みつかれ、う、といえば噛みつかれる。

音ってどれだけ必要なんだろうと思うんだけど、その一つ一つに説明を求められる。「だますかすこう」とか言ったら、何日かかるかわからない。7音もあるし。

ダマスカス鋼の話は、恐ろしいほどしたはずで、それでも一切の妥協はおそらくない。もう決着がついている問題なのに、一切の決着はない。すべての特性は話しているのに、それを納得しない。それは分かる、受け入れがたいのだ。

常識を超えている。

わたしたちは工業製品を売っているのであって、セールストークを売っているわけではない。言葉なんて単なる言葉でしかないのだが、リラは言葉を売るのが商売なのだ。

「まあ、暇だし、とことん付き合うけど、この銃に触って見ないことにはなににもわからないわよ？」

「わたしは銃なんて撃てません」

まあそうだよねえ。ふと思いついて、旧式の銃と新式の銃をリラに渡す。

「重さがぜんぜん違うでしょ？ 持ってみて？」

「あ、軽いですね」

「そう、これがダマスカス鋼。軽いのに、同じ強度を保てる。だいたい半分の重さかなあ、正確には計ってみてはいないけど、鋼板を薄くできるの」

リラはしばらく考えていたが、

「薄いと軽くなるんですか？」

と恐ろしくよく分かってない言葉を返す。

「使う鋼鉄の量が減れば軽くなるでしょ？ たとえばリラさんは大量の書類を背負ってくるけど、それが半分に減ったらどう？」

「楽ちんですね、社主がうるさいんですよ、とにかく文字は小さく書けと、それですか！」

「うん、まあ、そんなもんかな」

リラと話しているのは正直楽しい。

たぶんそれがリラが重宝がられている理由なのだけど、妹ができた気分になるし、どんどんと教えてあげたい気持ちになるぐらいに素直なのだ。ときおり、猛禽のように執拗になるけれども、問題ないところを答えているときには不快だと思ったことはない。

たぶん、甘え上手。

その上手に心を許してしまっているのだ。

「上長から報告せよと言われてます。簡単に言うとシルバさんの工房がどう動くつもりなのか。神経質ですよ。わたしもそう思いますし、なんで、こんなに神経質になるのかわかりません

。なにか動いているのかわかりませんが、週報を発行していてもわからないことはあるんです」
リラは正直で、率直で助かる。

ルナが対峙しなければいけないのは、世界の情報を権力と絡んで統制しているクリフォードなのだ。

「あのさ、シルバ。ドライゼ銃の効能は出してしまっているの？」

シルバはぼかんとしたが、あー、考えてないんだなと理解した。

これはわたしが管理する問題だ。

「これは極秘だと、週報は守れるかしら？ それを守れるならば、いくらでも話すけど、書いては駄目。だけど、すべてを話す」

リラはしばらく考えた。

「社主の、」

「だめ！ あなたの問題なのよ！ あなたは奴隷なの？ わたしはあなたと向き合っている。あなたに話すんだから、あなたが問題なの。リラ、あなたは信頼できるの？」

時間は長かった。

震えるちびを見ている時間は拷問に等しかった。

一時間ぐらい経って言葉が出た。

「わたしには手にあまるんですよ。社主が書けと言えば、書かない訳にはいかないですし・・・」

散々考えてこれか。

まあ結局クリフォードと面と向かうしかない。会ったことはないけれど、若く情熱的な貴族の青年だと聞いている。つまり私財を投じて事業をしているわけで、社を傾けないために悪事を働く恐れがないことだけは分かっていた。それに噂では、リニーに頼み込んで体験談を野バラの装丁の本として、ただしフィクションとして発刊し、それで現在を書く使命に目覚めて、週報を発行するようになったと聞く。

生粋の大公派。

あらしにあこがれるシルバを悪いようにするようには思えなかった。

「直接、クリフォードと交渉をします。それぐらいの用心は許してほしいの。あなたが信頼できないのではなく、全権を握っているのはクリフォードだから、あなたの社主と直接話さないと埒が明かないの」

リラは不満げに眉根にシワを寄せるが、不承不承納得をする。

「なにか、戦場を変えてしまうような銃なんですか？ たとえばボルニアの騎竜兵団に対抗できるような？」

「クリフォードに会って、話すかどうかを決めます」

まあ、実際に現物は見ているので、銃に詳しければ、それがどういうたぐいのものなのかはわかったはずではあるんだけども。

リラは、あさりのバター蒸しの餌食になった。

丁寧に砂吐きをさせたあさりは、とにかく美味しい。

夕食をまさかのシーフードだとは思わない。鉾山に向かっている山道である。

「わたしたちはおいしいの。それが全部だしね。あなたをどうこうしたくない。でも、いつでもおいしいから来て。あなたは家族だわ」

リラがどう考えたかは知らない。

それは知らないほうがたぶん美しい。

リラは感心し、なんでペネスで海の幸が手に入るんですか？ と聞く。

「それは謎だし、わたしは市場で買っているだけだから。確かにふしぎよね。塩水で活かしたあさがりが届くのかしら？ 市で聞いてみてはどうかしら」

ルナの答えにリラは心を膨らませ、わくわくとしている姿は、見ていて可愛らしかった。

「リラさんは、生粋の記者ね？」

「はい？」

「だって、知りたいことが大量にある。どんなことでも知りたいんでしょ？ それを知るためならなんでもする。それが記者じゃない？」

リラはしばらく啞然としていたが、言葉の意味がわかって、震え始める。

「あ、あの・・・」

泣きそうなリラをあわててなだめる。

「わたしは、正直なところを言ったつもりよ。リラさんが立派な記者だと言ったつもり。正直に言えば面倒くさいのだけれども、その面倒臭さも含めて、立派な記者なの。もしかして言われたことがなかった？」

リラは耐えた。

「ルナさんにお聞きしたいことがあります」

「聞くわ、手短かにね」

とても手短かにリラは聞く。

「シルバさんは恋人ですか？」

「なんで、わたしとシルバの関係に意味があるの？」

ルナがシルバとの恋仲を公式に否定するとリラはそわそわとし、マシンガンのように話し始めた。

「だっておかしいじゃないですか！ どうしてそこまで献身的になれるんですか？ 紙に書いてあるだけでダマスカス鋼を探しに行ったり、資金を調達するためにあちこちの貴族に出資を募ったり、どんだけ働いているんですか？！」

まるでそれが自分の問題であるかのように嘔みつき、それは好奇心というよりは、自分の問題をルナに重ねていて、解決策を提示してくれないかと縋るようだった。

もちろんそんなに甘えられても困る。

「これは兄の工房のことなの。その稼ぎ頭がシルバ、兄の工房を回すためには、シルバがお金を儲ける手助けをしなくちゃいけない。なにかおかしいことがあるかしら」

リラはしばらく黙った。

「でも、ルナさんの入れ込み様は異常です」

うるさいわね。

「だって、お話いただいた鉱山用の、えーと」

「排水システムかしらね」

「それです、それだって、ほとんどルナさんが決めてるじゃないですか！ ルナさんが勝手に動いて全部まとめてきたんでしょ？」

「だって儲かるんだもん！ なんで工房全体で儲かる方法を見つけたら働いてはいけないの？ わたしはお金が欲しいの！ 工房は黄金を飲む竜だわ。いくらあっても飲み尽くされてしまう。お金がなくなると餓死しちゃうの」

それでようやくリラはルナの状況を理解し、舌鋒を収めるが、ぼそっと聞く。

「でも、シルバさんが好きなんですよ？」

しつこい。

蟹伯爵の鉱山に到着すると、そこが最良の事例になるとわかった。

坑夫である奴隷たちはガリガリに痩せ細っていて、人間として生きているのが信じられないほどだった。

「とにかく、奴隷の消耗が激しくて、カネがかかって仕方ないのですよ」

激しい軽蔑はするのだけれども、こんな奴らに売らなければならないのかという動揺はどうしても生まれてしまう。奴隷が消耗するだと？ 人だぞ。お前の所有物じゃない！ 全員に人生があるんだ。

「き、機械は消耗しません。故障したらいつでも飛びつけます。こんなのを放置なんて・・・、」

暗にこれは犯罪だと言っているのだが、愚かな炭鉱主はそれに気づかない。

「助かりますなあ。頼りにしているんです。約束通り、導入した結果は仲間に伝えますし、良い結果であれば、わたしの報告は喜ばれます。シド中の炭鉱主が群がるでしょう」

この殺戮がシド中で行われているのかと思うだけで、呆然とするのだけれども、シルバが言い出したことがいかに正しかったかを、戦慄をとともに理解した。

これはシルバのバランス感覚というか、世界理解の正確さなのだけれども、これが稀代の名君としての素質というか、シルバの感覚の正しさが、シドを救うことになる前例になるのだろうか。

「食事を出そうよ。これじゃあ死んじゃうよ！　じゃがいもはあったよね？　コンソメで茹でるだけだけれども、おいしいかな？」

「ちょっと！　うちの食材も限りがあるから！　適当なことを言わないで！」

「でも、こんなのじゃあ、仕事できないよ。伯爵？　いいですか？　ぜんぶ費用はうちなので、振る舞っていいですか？　おいしく調理します」

「シルバ、余計なことは言わないで。お金の関係はきっちりしないと。遺恨が残っちゃう。お金の問題は任せてくれると言ったでしょ？」

蟹伯爵は考えるけれども、拒絶はせず、ルナはバターを探し始めた。

回収しないと、持ち出しじゃないか。

なんで、最低限を備えていない連中のためにうちの備蓄を出さなければならないんだろう。セレンを見ると目が座っていた。

「請求するから、これは費用だから」

セレンはコクリと頷き、市場価格を無言で割り出し、慣れた動作で請求書を書き始めた。

ちょっと、高いかなとは言わなかったけど、交渉できそうな範囲の値段だった。

そもそも、納品してから請求するので、交渉もクソもない。

考えあぐねていた時にふいに声がかかった。

「リラ、ずいぶん熱心に仕事をしてるじゃないか。ようやく記者の仕事がわかってきたかい？」

見上げると、貴族然とした正装の男性。

「クリフォードさま！　なんでこんな辺鄙なところまで？」

「シルバさんの工房に用事があったんだよ。それで聞いたらこちらに向かったと言うから、散々だよ。それでここまで来たんだ。重い荷物を運ぶ隊列だし、ここまで一本道だから徒歩でもいつかは追いつくだろうと思ってね」

初めて会うクリフォードにルナは啞然とし、言葉を失った。青年はにこりと笑う。

「ルナさんですよ？　お噂はリラから散々に、とてもお美しい。兄上の工房を支えるために、散々に資金を集めているとか。それで、大口のスポンサーから話をつけてきてくれと言われてきたんです、出資がしたいと。悪い話ではありません。無制限に出資するとされています」

ルナは信じられなくて、言葉を失う。

「まあ、信じられなくても仕方ありません。わたしも理解できませんでしたから。でもそれよりも小さな事業を成功させるべきではないでしょうか？　キスト郷、この鉱山の状況は正直週報を

発行する我々としても、見て見ぬふりはできません。少なくとも改善のために費用を出すべきではないでしょうか。それがじゃがいも代というのはどうでしょう？」

蟹伯爵は考える。

セレンはあわてて話し出す。

「じゃがいもはいま高いんです。産地はひどい被害です。豪雨がひどかったんです！」

「そうか」

「水害がひどかったのは分かっているはずですよ。50%の値上げを提案します」

「それは暴利だね」

ルナは必死のセレンを遮って、口を挟んだ。

「そうですか？ あなたは市価を無視していることになります。あなたは市場価格を無視する商人という烙印を押され、とにかくぼったくる人という事になります。それは週報で伝えられるかもしれない」

ルナの機転のきいた脅しにすこし蟹伯爵は戸惑い、すこし考えた。

「ペネスの市場価格を確認してから、ではどうでしょう？」

えらくまっとうな言葉だったが、おそらくペネスの市場の最安値を探すつもりなのだろうと踏む。

「たぶんわたしたちが提示する価格より安い価格はないはずです。うちの工房はいつもカツカツなんです。最安値で買ってないとお思いですか？」

「ふむ、それを信じよう。あなたはいつでも信用できる商人だ」

気付いてみると、恐ろしくフェアな交渉が成立していて、じゃがいも代は回収できそうだった。交渉成立と見てセレンがじゃがいもを切り始め、シルバが脇で湯を沸かし、そこに調味料を溶かしていく。

バターとコンソメの香りが食欲をそそり、セレンはその濃厚なスープに薄切りにしたじゃがいもを投入していく。表面積を大きくすれば、味は濃くつく。気付くと鉱山の奴隷たちがこちらをじっと見ていた。少量のキノコも入れる。旨味がブーストされる。

木製の皿を出して、その炭鉱の坑夫たちに出すと、空腹から人が寄ってきた。

だれも、それがうまいなんて思っていない。それが料理だから食べるだけで、それが恐ろしくシルバの心を痛めた。材料がない。海産物はないし、醤油も味噌もない。ほんとうの美味しいがない。だれが、一番美味しいものを出せなくて、それでいいと思うのだろう。それでも申し訳程度にいったキノコは、このお粗末な料理に旨味を彩っているはずだ。

「この食事は申し訳ないですが、材料が揃いませんでした」

「キミは一流になり始めているな？」

ルナの言葉によそられた皿を味見をしたクリフォードが、にこりと笑う。

「そんなこと」

「キミがどんだけ遠慮がちか理解したよ、ルナ。キミは最高の外交官だよ。外交は卑賤な意味も含むから、交渉官といえはいいか。キミがしているのは、貴族の交渉だ。否定しないだろ？ 貴族の商談で料理をうまく合わせられる人間なんて、あまりいない」

言っていることは分かる。

端的すぎて、どう返していいのかさえわからない。

「このキノコはいいね。とても美味しい。でも、こんなのを出せる人なんていないんだ。バターもいい、酢が混じっているのもいい」

「クリフォード卿！　ほんとに粗末な食事ですみません！」

にっこりと笑った。

「こんな食べたら、もっとお腹が空くよ。もっと美味しいものを用意してるんじゃないかって思うし、正直、これを浴びるほど食べるだけでもいいんだ。これは何ていうの？」

遠慮がちに、セレンがきゅうりの海鮮酢漬けを出す。

海藻が多すぎるのだけれども、生卵を落としたのがなぜか好評だった。

混ぜると、酢と卵が合っていく。

シド人であれば、マヨネーズは好きはずだ。濃い卵と酢を混ぜるとマヨネーズになるけれども、それが分かっていないシド人は多い。美味しい酢と、美味しい卵を混ぜると美味しいマヨネーズになる。

どうすれば美味しくなるかが分かっていないのだ。

みんな損してる。

大げさな話はやめて、どうすれば美味しくなるかだけに集中すれば、世の中は幸せで美味しい世界になっていくのに。ルナはせっせと給仕するセレンの姿を見ながら、呆然と思った。

正直、クリフォードは週報を発行している張本人であると理解できるほどに人当たりがよく、さわやかな好奇心を細かいところまで向けてくる。それが心地よくてどこまでも話していたくなるのだが、それがこの青年がクリフォード社の社主である所以だろう。

ルナはリラがなにか上司に話そうかどうかと思って、そわそわしているのを見て、ふと気づいた。ぽんとリラの肩を叩く。

「クリフォードさん、見てもらいたい銃があるんです、これがなんだかおわかりですか？」

ドライゼ銃を見せると青年は戸惑った。

「えっと、何ていうんですか？　銃口側から弾を入れない？」

「そう、元込め式です。こういった油紙に包んだカートリッジを装填します」

ルナから現物を受け取ると、青年は驚いた。

「驚くほど軽いね、半分ぐらいかな？」

「そうです、ダマスカス鋼です。シャビに仕入れに行ったら、通常使っている10ミリ鋼板なんてないって言われたんです。だから、5ミリ鋼板。耐久テストには合格しています。おそろしい耐久性ですよ」

クリフォードは信じられないと言った様子でその銃をまじまじと眺め、実演してもらえますか？　とシルバに渡す。

「あ、はい・・・」

シルバはおどおどと受け取り、腰のベルトポーチに手を伸ばし、弾倉を握って、美しい所作でそれをボルトアクションの装填部に込める。

「危ないからどいて！」

ルナの言葉に坑夫たちはシルバの射線からどき始め、シルバはなんの気もなしに、すぐ近くの樹木に狙いをつけた。

発砲。

すぐに腰に手を伸ばし、次弾を込める、発砲。

クリフォードはそれを啞然と見ていた。10発撃ったあたりでさすがにルナも止めたくなり、「まあ、こんなものもあるんですが、さすがにこれは報道はしないでください。ボルニアが侵略してくるかもしれない時に手の内を明かすのは致命傷です」

「あ、うん、そうだね。これは危険すぎるかな……。でもすごい幸運だ。こんなものがシドにあったなんって。スポンサーがどんだけつぎ込むかわからなくなってきたよ」

クリフォードの発言は非常に危険な匂いがするのだけれども、この青年が間違っただ道に進むとは思えないので、それを信用することにする。

「週報では厳禁です」

「ああ、いいよ、こんなの見せられちゃったら、ちょっと無理かな」

賭けには勝ったというよりは、常識的な人だと確認できた、ぐらいなレベルで、この優男は生涯信用してもいいと、思えるぐらいには信用できると、思えてしまったのはふしぎだった。この男を信頼してしまった人の感想を聞きたいところだが、だいたいわたしと同じような感想が出てくるのだろう。

ルナが生涯信用した人間は二人。

ひとりがクリフォード、もうひとりは秘密で、それが生涯の夫になる。

そう考えると、クリフォードはルナの夫になるかも知れなかった。

「社主！ キュディスとトランの動向が入ってきたんですが！」

リラの声に、落ち着いた様子で書面をよこせという。

書面はだいたい支社から届いた殺風景な書面で、キュディスの虹翼騎竜兵団が全翼をアイギスで飛ばしたとか、トランのタルボットギルドの浮遊船団が首都に集結したとか、うわさレベル物がやってくる。タルボットはいつでも船団を集結させるし、日常的に物騒なことは起きている。

しかし、それでも何も起きないのが常。

クリフォードは一文に気付いて、あわてて言う。

「キュディスがボルニアの後見についた。キュディスの、えっと、黒の兵団？ ってなんだろ……。が、ボルニアの諜報部隊として参画するって……」

「キュディスとボルニアが同盟を結んだんですか?!」

クリフォードはしばらく考え、うん、可能性はある、と静かにいう。

ボルニアの侵攻が北へ、ザブンテ、エストと吞んで、北方最強国であるキュディスとトランの二国と国境を接した時点で、南に転進するとは誰もが言っていた。その流れで行くと、キュディスがボルニアを手駒のように使って南へと侵略を開始するのは、当たり前の判断と言ってよかった。

シドは熟れて豊かで、墮ちそうな国家である。

そこに侵略の手が伸びてくるのは常識的な気さえした。ルナはじれてジリジリするけれども、クリフォードは信じられないことに、確信を持ってワクワクしていた。これは後にその理由は分かるのだが、彼はこのショックがシドという大国にもたらす大革命にワクワクしていたのだ。そのほとんどはリニーというかシルバが成し遂げ、世界の形を全部変えてしまうのだが、それはまた別の話だ。

「これがきっかけになるんだ。シルバさんの技術力があれば、シドが変わり始めた姿を見せることができる。僕はそれを伝えたい。シルバさんの工房が加わったときの化学変化がどれほど劇的になるのかを、僕は見てみたいんだ、これは不相応な願望だろうか？」

クリフォードほど名声のある人物に言われて、揺らがないはずがない。

正直、この時期のルナはクリフォードに魅了されていて、シルバのことなど忘れていた。もちろんそれは一過性のことで、クリフォードが愛する世界を動かかしている人たちの方が重要だと気付くのはだいぶ先になる。まさか自分がその一人になるとは思わずに。

ルナの評伝はリラによって書かれるのだけれども、そこから、完全蒸気機関の女神と称されるまでになる経緯を書く人はいなかった。学びの天才とはルナのことだけれども、その経緯も不明だったし、論文にしか名前がなかった。

なにか異常に詳しいやつがいる。

その程度の認識で済んでいたのは、おそらくルナも目立つのを避けていたのだろう。

それでも、なにを言っても裏切りと言われる状況は否定しようがなく、一生を裏切り者として人生を終える。

ルナたちは、鉱山への機材の設置をはじめ、大きな声で指示を飛ばしていく。

それは不本意ながら、鉱山の奴隷たちを動員し、まず炭鉱の入り口に蒸気機関を設置し、そこから長々と動力線を坑内に引いていく。ポンプを置くのは奥の奥で、最も問題になっている出水地点だ。

「これで、ぜんぶの水かきは終わるから」

そういうと奴隷たちの士気が上がるのが心苦しかった。

ポンプの設置が、ほとんど苦勞なく終わるのがこんなに苦しいとは思わなかった。

設置が完了し、稼働し始めると奴隷たちは歓声を上げた。

こんなの、お金があれば簡単なのに！ それはルナが必死に掻き集めても足りないものだった

。

膨大な水を吸い上げるポンプが、この鉱山から重労働を一掃していた。

モーターとポンプの音色が心地よく、それだけで世界最先端の解決策を届けている気持ちにひたれた。

「ルナ、すごいね！ なんだろこれ！ 世界が変わっていく！」

ルナはひとりごちる。

(あなたが考えたのよ。全部あなたが作ったの)

「シルバ、あなたは謙遜しすぎだわ。もっと誇っていい。わたしは手伝っただけ。これはあなたの仕事なの。ねえ、クリフォードさん、そう思うでしょう？」

突然に振られた優男は対応に困って、そうかなと遠慮がちに言う。

「ぼくがリラに頼んだのは、あなたの取材なんです。それは、あなたが美人だからではない。銅版画家があなたの肖像を描きましたか？　ぼくが興味があるのは、あなたの工房を束ねる才覚なのです。シド最大の工房群をあなたは事実上差配している。あなたの兄のパルの工房群と言われると、莫大な資金が流れています。それを、シルバさんの工房が全部支えている、信じられないことです」

ルナはおどおどと動揺したが、こういう交渉は慣れていない。

そもそもなにをゴールにしていいかさえない。

「買いかぶりです」

「事実を見ましょう。ぼくは事実しか見ません、それが週報の支持につながっているし、ファクト以外は興味が無いんです。事実が伝わればそれでいい」

しばらく黙る。

「あなたは人間としては信じられないけど、交渉相手としては信用できる、かな？」

「奇遇なのですが、それは同感です」

ルナが言葉を言いそびれると、クリフォードは追い打ちをかけた。

「あなたにしか興味が無いんですよ。もちろん、週報の発行責任者として」

「る、ルナ、これって成功かな？　いちおうポンプは排水をしているけど・・・」

遠慮がちなシルバの声に我に返って、まあ、大丈夫かなとか適当なことを言う。シルバは流れ出る水量に夢中で、クリフォードなど見ていなかった。それが手打ちだった。そもそもシルバには興味がなかったのだ。交渉相手は、将ではなく馬だった。ルナが優秀だから優秀なシルバだったのだ。

クリフォードは佇まいを正し、改めてシルバに向き合った。

しかし実際にはそれは事実上ルナに向き合っていた。

「あなたに、ひじょうに有力な貴族から支援要請が来ています。いくらでも金払うと言われていたんですが、それは常識的な要請ではありません。無制限に金を払うと言われていています。ただし、その対価はおそろしいほどの「あらし」です。望む中で最も大きなあらしが提供されます。もし「あらしにあこがれる」のであれば、ぜひ受諾してください。わたしは強制はしません。「あらしにあこがれる」人だけが参加してほしいのです。あなたは「あらしにあこがれて」いますか？」

シルバは考えた。

ルナは口を挟んだ。

「今回の件はシルバが奴隷が酷使されている姿を見るのは耐えられないという利己的な理由から生まれたビジネスなのです。なので、奴隷の売買に賛同する立場の人達には絶対に賛同できません。ですから、奴隷売買をする方々から出ている資金ではないと確約してください」

クリフォードはにっこりと笑った。

「こんな簡単なことが最終条件だったとは」

〈了〉